

第 61 回国際学生会議

The 61st International Student Conference

事業報告書

「異文化理解による平和への貢献を」

~Contributing to Peace
through the Communication~





目次

第 1 章 国際学生会議	1
実行委員長挨拶.....	2
開催目的.....	3
国際学生会議の沿革.....	4
第 2 章 第 61 回国際学生会議	5
概要.....	6
総合テーマ.....	8
日程.....	9
プログラム全体の流れ.....	10
参加者名簿.....	11
スタッフ名簿.....	13
第 3 章 事前研修旅行	15
事前研修旅行総括.....	16
各支部事前研修旅行報告.....	17
第 4 章 本会議	25
全体総括.....	26
各分科会報告.....	27
分科会総括.....	69
各プログラム報告.....	70
第 5 章 感想	76
ISC61 の感想.....	77
ディスカッションに対するフィードバック	82

第 1 章 国際学生会議

実行委員長挨拶

開催目的

国際学生会議の沿革

実行委員長挨拶

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

この度、2015年8月20日から9月1日の13日間にかけて、第61回国際学生会議を開催いたしました。開催にあたりましては多くの財団様、後援団体様、そして個人の方からも多大なるご協力をいただき、大変感謝しております。多くの方にご指導ご鞭撻いただき、本会議を開催することができました。

本年度は、総合テーマとして「異文化理解による平和への貢献を」を掲げました。平和とはとても曖昧な概念です。終戦より70年を迎えた2015年の夏、10カ国を超える国々から学生が集まり、約一週間その曖昧な概念に真剣に向き合いました。議論を積み重ねていく中に、研修旅行や文化体験などが織り交ざり、参加者にとってこの一週間は異文化体験の連続だったことは間違いありません。世界の学生たちと共有する一瞬一瞬が貴重な体験なのです。その瞬間を意識的に捉え、理解をした時に、多くの気づき、そして学びがありました。

本会議における議論は決して簡単なものではありません。各国の文化や、各人のバックグラウンドが色濃く表出され、多様な意見が衝突を見せます。議論の時間を終えてまで、食事の時間、就寝時間まで話し合いが終わらない、そんな大きな衝突も本会議においては日常茶飯事です。しかし、その衝突の連続からは、単純な知識のみならず、その背景にある真意を抽出する事ができるのです。

この報告書には、そんな彼らの軌跡が残されています。13日間、全ての情景を一つ一つ載せることはできませんが、それぞれの議論や企画がどのようなものだったのか、「平和」という一つのキーワードを胸に、読んで頂けると幸いです。

この13日間が、参加者にとって、実行委員にとって、そして、今この報告書を手にしてあるあなたにとって、平和を考える良いきっかけとなることを心より願っています。

敬具

2015年9月吉日

第61回国際学生会議実行委員長

山永航太

開催目的

第 61 回国際学生会議(以下、ISC61)の中心としているテーマは、「異文化理解による平和への貢献を」です。戦後 70 年を迎える 2015 年の夏、世界中から学生が集まり、各々の価値観、思考、経験、それらすべてを真剣にぶつけ合うことで、異文化の理解と、また平和という概念を具体化し、理解を深めることで平和に貢献していきます。

平和といっても、個人・地域・国など様々なレベル、そして規模が存在します。ISC61 は、二つの平和貢献のあり方を目的としています。一つ目は本会議における議論によって導き出される成果が、社会に発信されることで生じる平和です。ISC61 では“いま”取り扱うべき問題を取り上げ、“学生”だからこそできる、率直で真剣な議論を展開し、社会へと発信します。つまり、様々な問題に対する学生ならではの視点を社会に与え、気づきを促し、平和への貢献が可能となります。

二つ目は、多様な価値観が認められ、平和という曖昧な概念を自らの軸にすることが困難な現代社会において、参加者一人一人が自らにとっての平和とは何か、に対する答えを本会議中に得るという個人レベルでの平和貢献です。

海外との接点が比較的少ない島国日本において、世界各国より学生が集まり、約一週間寝食をともにしながら議論を展開することは、多くの異文化を体験することができる貴重な機会です。また、日常生活のコミュニケーションと、議論というコミュニケーション、二種類のコミュニケーションを密に繰り返すことで、一般的な海外経験では得難い経験、そして参加者同士の関係を築き上げることができます。

このように本会議を通じて、あらゆる角度から平和を考え直し、それぞれの形で平和へと貢献していくことが ISC61 の最大の目的であり、使命です。

国際学生会議の沿革

国際学生会議の母体は、1934年に始められた日米学生会議にあります。日米開戦前夜両国の関係の悪化を憂える学生有志が奔走し、「世界の平和は太平洋の平和、太平洋の平和は日米間にあり、然してこの現実には若き日米学生の間においての率直な意見の交換、及び、相互理解の信頼を促進しなければならない」という提唱文の下に、第1回日米学生会議が青山学院大学において行われました。会議は1940年まで続けられましたが、1941年の日米開戦により中断の憂き目を見ることとなりました。

戦後、日本の新しい胎動の中で、1947年に戦争の反省を踏まえ、「各国の親善と正しい理解こそが国際平和達成への唯一の道である」という認識の下、第8回日米学生会議が日本で開催されました。その後、1954年にアメリカで行われた第15回会議を最後に日米学生会議は解消され、国際学生会議へとその流れは継承されました。日米学生会議は、1964年にOBの手により再結成され現在も行われています。

第1回国際学生会議は、1954年に12カ国から84名の外国人の参加を得て、28日間にわたり東京、関西、北海道、仙台で行われました。以後国際学生会議は、国際政治、経済、社会、文化などの多方面からの活発な討論と研修旅行を行って発展していきますが、その時々の世界情勢とともに多くの屈折を経ています。1962年の第9回国際学生会議では、従来の本会議、研修旅行に加えて、団体代表者会議が新しく設けられ、会議をより有効なものにするために、決議をもって団体間の具体的協力活動を提起しました。それによって、以後の会議の充実と参加団体間のより強い結束を目指しました。

1968年には、学生運動のなか日本国際学生協会の中央委員会が分裂し、翌年の国際学生会議は行われませんでした。1970年には会議が再開されました。第32回においては、日本人参加者選抜制度を廃止し、国際学生協会員への国際交流の場を広げました。また、第37回では、帯広市とのタイアップにより、市民の方と国際交流の体験を共にしました。そして第43回には参加国が計16カ国に上がる成果をあげることができました。第45回においては、多岐にわたる分野から専門家をお呼びして、議論する機会を設けることで社会との関連をさらに深めました。2014年には第60回という節目の回を迎えることができました。以上のような経緯を経て、2015年第61回国際学生会議を開催いたしました。

第 2 章 第 61 回国際学生会議

概要

総合テーマ

日程

プログラム全体の流れ

参加者名簿

スタッフ名簿

事後報告会について

概要

会期・場所	・事前研修旅行 8月20日～23日 (京都、神戸、大阪、岡山、九州の各地で開催) ・本会議 8月24日～9月1日 (国立オリンピック記念青少年総合センター)
総合テーマ	『異文化理解による平和への貢献を』
分科会テーマ	・ナショナルアイデンティティ ～国際社会における形成、揺らぎ、維持～ ・食の流通における安全と差別 ・LGBT フレンドリーな社会に向けて ～今私たちにできる取り組みとは～ ・越境する市民間関係 ・教育とグローバリゼーション ～global citizenship education の可能性と限界～
ね ら い	戦後70年の節目に、世界中の学生が平和を模索する場をつくり、 彼らが協議した成果を発信し、社会の改善に貢献する。
公 用 語	英語
参 加 者	日本人学生 35名 (内、実行委員 14名) 外国人学生 21名
参 加 費	日本人学生 5万5千円 外国人学生 2万5千円
内 容	分科会における問題提起、議論 成果発表会 (サマリー発表) 日本文化体験/東京観光/各種交流会

〈ISC61 参加大学〉

北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、一橋大学、金沢大学、奈良女子大学、
神戸大学、山口大学、亜細亜大学、関西学院大学、京都産業大学、慶應義塾大学、
国際基督教大学、上智大学、創価大学、東京女子大学、同志社女子大学、明治大学、
立教大学、早稲田大学 (計 21 大学)

〈ISC61 参加国・地域〉

アメリカ合衆国、イタリア、インドネシア、コロンビア、スリランカ、中華人民共和国、
日本、フィリピン、ブルガリア、ベトナム、モロッコ (計 11 ヶ国)

主催 日本国際学生協会
(I.S.A.: The International Student Association of Japan)

助成 国際教育振興会賛助会
双日国際交流財団
平和中島財団
三菱 UFJ 国際財団
MRA ハウス

協賛 WATAMI

後援 外務省
国際教育振興会
経済人コー円卓会議日本委員会

総合テーマ

異文化理解による平和への貢献を

今年の総合テーマは、「異文化理解」と「平和」という二つのキーワードがあります。世界中の学生たちが、多様化する現代社会の中で、多くの異文化体験を通して平和について考え直す機会を提供したい。そんな思いが込められたテーマです。

「異文化理解」とは

自分の持つコミュニティとは全く別物の世界へと飛び込むこと、約1週間。学生という一つの共通事項があるだけで、なんのしがらみにとらわれることなく、国際問題について真剣に議論を行います。寝食も共にし、英語での日常生活を送る。ISC61で起こることはすべてが異文化体験であり、意識的に、そして全力でそれを感じ取ってほしい。本会議での一週間は「異文化理解」の宝庫です。数多くのチャンスが散りばめられた本会議で、他者、そして自分と向き合う時間を存分にとってほしいと考えました。

「平和」とは

2015年の夏、第二次世界大戦終戦より、70年という節目を迎えます。ISC61では世界各国の学生たちが貴重な時間を共有し、真剣な議論を展開します。その場の全員が、「平和」を見つめ直すきっかけとなる。そんな貴重な場をISC61は提供します。本会議では、5つのテーブルに分かれ、諸問題に対する「平和」を追求し、その過程における参加者自身の「平和」をも追求してもらいました。

日程

事前研修旅行		
8月20日（木） 8月21日（金） 8月22日（土） 8月23日（日）	神戸・大阪・京都・岡山・九州 各地にて開催	
本会議		
8月24日（月）	開会式 基調講演 ウェルカムパーティー	国立オリンピック記念青少年総合センター
8月25日（火）	分科会1 分科会2 日本文化体験	
8月26日（水）	分科会3 フィールドワーク 分科会4	
8月27日（木）	分科会5 分科会6 ビンゴ&手紙～5年後の私へ～	
8月28日（金）	本会議研修旅行	
8月29日（土）	分科会7 分科会8 分科会9	
8月30日（日）	分科会10 分科会11 分科会12	
8月31日（月）	成果発表会 フェアウェルパーティー	
9月1日（火）	閉会式 基調講演 解散	

プログラム全体の流れ

2014 年 11 月 《第 61 回国際学生会議実行委員発足》

2015 年 3 月・4 月 《各地説明会》

参加者募集のため、関東・関西両地域で大学施設や公的施設を使用して、説明会を実施しました。インターネットや、全国の大学へのチラシの配布、掲示を利用した広報に加え、実行委員と参加者が顔を合わせる説明会を行ったことで説明会参加者に国際学生会議の雰囲気を伝えることができました。

2015 年 5 月 《選考》

参加者の選考を参加申込書、面接の 2 行程で行いました。参加申込書では希望のテーブルテーマを選んだ理由やその時点での考えを問い、面接では実際に話すことで伝わってくるモチベーションやコミュニケーション能力、強みや弱みといった、テーブルでディスカッションを行うにあたり重要となる要素を確認しました。また、面接の中で英語力に関しての確認を行うことで会議自体の英語のレベルを保つことにも注力しました。

2015 年 7 月 4 日・5 日 《参加者招集会》

今年は国内参加者の顔合わせである招集会を合宿形式で行いました。目的としては、例年と変わらず、全体での交流を図り、本会議を円滑に進めるためのリレーション構築を行うこと、及び本会議でのディスカッションに備えての英語力の把握と興味範囲の確認、そしてディスカッションに慣れることです。合宿形式にしたことにより、スケジュールに余裕を持ち、より長い時間を共に行動することにより目的を達成し、有意義な招集会とすることができました。

2015 年 7 月・8 月 《各テーブルでの事前勉強会》

本会議前に 2 回の勉強会を国内参加者で実施しました。どのテーブルも事前に課題を課すことで効率的に勉強会を進め、議論のための知識を定着させることができました。今年は、協賛をいただいた WATAMI 様にこの事前勉強会でもご協力いただき、直接様々なお話を聞く機会を設けていただくなど更に有意義な時間となりました。また、日本人が不得意とする英語での専門用語の確認や、英語でのディスカッション練習を行ったことで、本会議中のディスカッションを有意義に進めることができました。あくまで日本で実施するものであり海外参加者は参加できませんが、同様に課題を出しインターネット上で共有する、あるいは、日本での事前勉強会の結果を本会議までに共有し意見を出し合うといったことをオンラインで行うことで、意識面・知識面で乖離が起きないように配慮しました。

参加者名簿

Table1 ナショナルアイデンティティ～国際社会における形成、揺らぎ、維持～

吉原広美	立教大学	Japan
澄川みずき	関西学院大学	Japan
白崎里奈	明治大学	Japan
新井英貴	京都産業大学	Japan
Michela Cavaglia	University of Turin	Italy
Nelson Emmanuel	Salcedo Tecnologica de Bolivar University	Colombia
Dyan DD Muhammad	Islamic University of Indonesia	Indonesia
Yicheng Zhang	University of Toronto	China

Table2 食の流通における安全と差別

小林慶	東北大学	Japan
斎藤真友	金沢大学	Japan
横山将大	山口大学	Japan
笹原望未	同志社女子大学	Japan
Putri Erifiasany Permatananda	University of Indonesia	Indonesia
Trang Thu Thi Nguyen	Ho Chi Minh City University of Social Sciences and Humanities	Vietnam
Quynh Anh Nguyen Ngoc	Ho Chi Minh City University of Foreign Languages and Information Technology	Vietnam
Noviana Astuti Irna Sakir	Makassar State University	Indonesia

Table3 LGBTフレンドリーな社会に向けて～今私たちにできる取り組みとは～

内藤大貴	東京大学	Japan
加茂悠希	一橋大学	Japan
角星歌	立教大学	Japan
平地清乃	早稲田大学	Japan
Alfi Naufida Ulinuha	University of Indonesia	Indonesia
Nguyen Thi Phuong Anh	International University, Vietnam National University	Vietnam

Fayrouz Atrakouti	Hassania School of Public Works	Morocco
Kenneth Jim Joseph Jimeno	University of the Philippines Manila	Philippines
Table4	越 境 す る 市 民 間 関 係 を 考 え る	
遠藤彰	東京大学	Japan
増子詩織	亜細亜大学	Japan
石上漱真	筑波大学	Japan
石塚啓太	国際基督教大学	Japan
近谷詩織	国際基督教大学	Japan
Mariane Philine		
Toledo Cantimbuhan	De La Salle University	Philippines
Elena Veselinova Vasileva	University of National and World economy	Bulgaria
Brian Royal-Rubin	UCLA	the U.S.
Abid Abdurrahman Adonis	University of Indonesia	Indonesia
Table5	教育とグローバリゼーション ～global citizenship education の可能性と限界～	
原田大輔	明治大学	Japan
高澤幸代	創価大学	Japan
金村浩史	北海道大学	Japan
内田有咲	関西学院大学	Japan
Shashini Tara Mallikage	University of Sri Jayewardenepura	Sri Lanka
Ta Minh Ha	Ho Chi Minh City University of Social Sciences and Humanities	Vietnam
Tran Dao Khanh Chau	Ho Chi Minh City University of Social Sciences and Humanities	Vietnam
Neta Cynara Anggina	University of Indonesia	Indonesia
Muhammad Bilhaqi		
Ibnukhoiry Budiman	University of Indonesia	Indonesia

スタッフ名簿

第61回国際学生会議実行委員会

実行委員長		山永航太	立教大学4年
副実行委員長		吉田恵美	関西学院大学3年
財務		波多野愛子	東京女子大学3年
広報	部長	長岡れいな	慶應義塾大学2年
	スタッフ	中村春華	奈良女子大学2年
国際渉外	部長	西川可奈子	関西学院大学3年
	スタッフ	才内麻里菜	関西学院大学2年
企画	部長	中野皐月	筑波大学3年
		中村春華	(兼任)
		才内麻里菜	(兼任)
テーブルチーフ			
	部長	石井智士	明治大学4年
		青島莉奈	早稲田大学3年
		根本つばさ	上智大学4年
		宮内栄	国際基督教大学3年
		山田智希	東京大学3年
撮影係		柴野達至	神戸大学2年

各支部研修旅行実行委員長

京都支部	八田優希	同志社女子大学3年
大阪支部	廣田泰博	関西大学3年
神戸支部	川島賢斗	甲南大学2年
岡山支部	田渕志帆	ノートルダム清心女子大学2年
九州支部	長野さくら	北九州市立大学2年

日本国際学生協会 中央役員

会長	廣田泰博	関西大学3年
中央事務局長	田中楓梨	関西学院大学3年
財務部長	市口尚義	関西大学3年
広報部長IW	安藤実	関西大学3年
部長 Ex. 部長	成松真優	同志社女子大学3年
	中川怜士	甲南大学3年

各支部支部長

東京支部長	小田大貴	中央大学3年
京都支部長	廣田雅樹	同志社大学3年
大阪支部長	中川颯汰	関西大学3年
神戸支部長	月岡智恵美	甲南大学3年
岡山支部長	山地杏奈	ノートルダム清心女子大学3年
九州支部長	井万里奈	北九州市立大学2年

第 3 章 事前研修旅行

事前研修旅行総括

各支部事前研修旅行報告

事前研修旅行総括

事前研修旅行責任者 山永 航太

1. 事前研修旅行概要

母団体である日本国際学生協会（以下 I. S. A.）のプログラムの一つである国際学生会議（以下 ISC）に参加する海外参加者を I. S. A. の各支部（神戸、大阪、京都、岡山、九州）に派遣し、I. S. A. 会員からの事前研修旅行参加者とともに観光や文化交流を行います。これは各支部の実行委員が企画し、ISC 本会議前に行われるもので、今年は8月20日から23日に行いました。目的は、本会議前に海外参加者に日本文化に慣れてもらうことと、国内参加者が I. S. A. 会員や海外参加者と交流できる機会を設けることです。

2. 事前研修旅行意義

事前研修旅行の意義で最も重要なことは、ISCに参加する海外参加者が日本の文化・慣習に触れてから本会議に臨んでもらう事です。そして、I. S. A. 会員にとって、国際交流へのステップを踏む機会を提供する事です。

企画から参加まで、全て『学生』が主体となって動くこの事前研修旅行には『学生』ならではの発想と視点から企画された様々なプランがあります。

3. 総括

今年の事前研修旅行は大きな変更が3点ありました。まず、神戸支部と大阪支部を合同開催にしました。地理的に合同にする方が、時間を持て余すことなく堪能できると考えたからです。残る二つは日程と移動手段です。例年、4日間を自由に使い、東京への移動は大阪から夜行バスを使用していましたが、参加者の疲労軽減を狙い、4日目を移動日と設定し、研修内容を緩めました。それに付随して、移動手段を新幹線へと変更しました。しかし、研修内容、地理を考慮し、阪神事前研修旅行のみ、例年通り夜行バスを使用しています。

上記3点を変更するにあたって、各支部との連携や金銭管理の徹底を強化しました。各支部に担当実行委員を設定し、情報共有を綿密に行いました。今までにない多くの取り組みに対して、柔軟に対応することが求められ、また、想像力も必要とされました。その中で各支部の実行委員長をはじめ、実行委員全員の動きが申し分ないものであったことは、東京に到着した参加者たちの顔を見れば、一目瞭然でした。参加者が口を揃えて「Amazing」と称賛していたことが大変印象的です。

最後になりましたが、この事前研修旅行を開催するにあたって企画に携わってくださった各支部実行委員の皆様、参加してくださった I. S. A. 会員の皆様、協力してくださったすべての方に感謝致します。本年度の数多くの変更点を踏まえ、今後もこの事前研修旅行が改善を続け、海外参加者のみならず、関わる人全てに、新たな発見をもたらすものである事を願います。

神戸・大阪支部 総括

神戸実行委員長 川島賢斗

阪神の2支部では国際学生会議の事前研修旅行として、4日間海外参加者と神戸と大阪を観光しました。今年は例年とは違い大阪と合同で行うことにより、海外参加者と国内参加者の比率がより近いものになりました。また1人の海外参加者に対し3～4人の国内参加者で班を作り4日間行動してもらう事で、従来に比べ非常に密な交流をする事が出来ました。さらに、班行動を行うことにより班以外の海外参加者と交流する機会がなくなる事を懸念していましたが、国内参加者が班以外の海外参加者とも交流を深めており、事前勉強会での国内参加者への意識付けが非常に大きな意味を持っていたことを実感しました。

しかしながら遅刻者対応、花火大会、フェアウェル後の行動、ホストの交通費不足など細かい部分での課題を多く残した事は間違いありません。これらは大阪との共有不足が最たる理由であり早い段階でしっかりとした共有を行う必要があると感じました。ただ、参加者全員が“海外参加者の為に”行動しており、海外参加者を含めた全員に笑顔が絶えなかった点を踏まえると、本年度の阪神事前研修旅行は非常に良いものだったと言えるのではないのでしょうか。

大阪実行委員長 廣田泰博

阪神合同事前研修旅行で大阪支部の実行委員長を務めました、関西大学3年次生の廣田泰博です。私自身が関わり続けてきて今年で3年目を迎える事になったこの事前研修旅行では「3年間関わり続けてきた人にしかできないこと」を考え行動に移したものです。本研修旅行のテーマとしては「過去から現代まで日本の変遷をたどる旅」を、最終的なゴールとしては「さらなる日本のファン獲得」を目指してきました。しかしそのゴールに向かって私たちが一体何ができるのかを考えたときにぶつかった壁があり、その壁を取り除きさらにいいものにしようとし、大阪支部と神戸支部が一丸となり作り上げてきた研修旅行です。

従来の研修旅行で問題視され続けていた点は「完全に」とまでは言い切れませんが取り除き、新しいSTの形をこの場に残すことができただけで私がこの場に携わらせていただいた意味を果たすことができたのではないかと実感しています。

今後に向けて運営上の様々な課題は残っていますが、最高の研修旅行がここから出来上がるのではないかと考えています。終わりにりましたが本研修旅行の運営に携わってくれた各実行委員には非常に支えられ、彼ら彼女たちが居たからこそ、ここまでのモノを創り上げることができ、そして国内・海外からの参加者が居たからこそつけられた「彩」がこの研修旅行にはあったのではないかと考えております。本研修旅行の運営に携わっていただいたすべての方に対し、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

阪神事前研修旅行参加者の声

高階 空也

今回初めて I. S. A. のこういったプログラムに参加させていただきました。ISC の前に日本を楽しんでもらう企画として、8 人の海外参加者と神戸、大阪を観光し、非常に仲良くなることができました。少数の日本人と海外参加者 1 名の班行動のもと 4 日間行動し、一緒に観光した海外参加者とは非常に密な関係を築くことができ、また海外参加者にも満足 of いく Tour になったのではないかと、思います。また 1 人だけでなく、他の海外参加者とも話す機会があり、何よりも 8 人に共通していたのが笑顔でした。その笑顔を見て、「日本に来て楽しい」と行ってくれるだけで私も笑顔になり、また心がすごく爽やかになりました。ですが、時々班によっては日本語だけが飛び交い、日本人と話せない海外参加者もいたと私は思うので、その点だけ少し気にはなりました。

海外参加者の日本旅行のお手伝いをして、その人たちにとっての日本を良いもの、そして楽しいものにしようという責任感も感じつつ、英語を使ってコミュニケーションを行うことで自分にとってもいい経験になりました。何より海外の子達と本当に仲良くなることができたのは、非常によかったと思いますし、これから将来にもつながる” 繋がり ” になったと思いました。

《日程》

8 月 20 日 : 「姫路」姫路城、好古園(茶室体験)

8 月 21 日 : 「神戸・三宮」神戸異人館、南京町散策、神戸港クルージング

8 月 22 日 : 「大阪・ミナミ」大阪くらしの今昔館(浴衣着付け体験)、黒門市場
フードサンプル作り体験、伊丹花火大会

8 月 23 日 : 「大阪・大阪市内」アサヒビール工場見学、スカイビル空中庭園
フェアウェルパーティ(グランフロント大阪)

京都支部 総括

実行委員長 八田優希

2015 年度の京都事前研修旅行を無事に終えることができました。今回私たちがこの 4 日間を通して最も感じたことは、国際交流とは何も特別なことではないということです。もちろん私たちは、海外参加者と国内参加者がより良いコミュニケーション、交流を行えるよう一生懸命準備をしてきました。なんとと言っても言葉の壁が懸念点です。途方も無い時間をかけて磨かれやっと持てる英語に対する自信は、そんなすぐに身につくことではありません。私たちは会話せざるを得ない状況に自分たちを置くことを心がけました。海外参加者に対する国内参加者の比率を例年より大幅に減らし、初日は国内参加者を抜きにし、より少ない人数で行いました。

結果、海外参加者が私たち運営側を信頼し、心配事などを相談できる環境を作るともできました。このことは懸念点の一つであった、海外参加者に安心感を与えるための良い対策にもなりました。

また例年と比べて思いがないある変化がありました。それは『差』がなかったということです。国内参加者と海外参加者。英語を流暢に話せる人とそうでない人。もともと知り合いだった人と初めて会った人。そんな差をどこにも感じられなかったのです。少ない人数で歴史ある京都見て、触れて、体験する。その中で国内参加者も多くの初体験がありました、それを海外参加者と良い意味で新鮮な気持ちで共感することができ。そのような小さな一つ一つがこの京都事前研修旅行の雰囲気を作り上げたのでしょう。そんな中で自分と相手を比べることは、全く意味のないこと。

この国際交流をうたったプログラムで、特別でない人と人との交流ができたことが、私は感動でいっぱいですし、関わってくださったすべての方々に本当に感謝しています。アットホームというテーマのもと企画運営を進めてきた私たちですが、まさに家族のような雰囲気に包まれたこの 4 日間を私たちは決して忘れません。

京都事前研修旅行参加者の声

西村一帆

今年は学生最後の夏休みだったので、今しかできないことを思う存分満喫しようと心に決めていたため、参加させていただきました。京都事前研修旅行には強い思い入れがあったのも、もうひとつの理由です。1年生のとき初めて実行委員をさせていただいたのが京都事前研修旅行でした。それをきっかけに世界がどんどん広がり、2年生では目標にしていた国際学生会議の国際渉外スタッフとして携わることができました。今回で運よく3度目の参加を達成することができ、これまでの思い出を振り返りながら、初心に戻ることができるいい機会となりました。

今年の京都事前研修旅行では4か国から海外参加者が集まり、異文化を感じられる刺激の多い3日間を過ごすことができました。茶道体験をしたり、日本食を作ったり、寝食を共にし、彼らの好奇心あふれるきらきらした笑顔を見て、日本には誇れるところが日常に満ちているのだと気づかされました。彼らと話すことで改めて日本の良さを学ぶことができ、日本人であることが以前よりも誇らしく感じられました。

その一方で、知識不足であることにも気づかされました。予習してきたにもかかわらず、文化や歴史に関する彼らの素朴な質問にすべて答えることができず、情けなさと同時に申し訳なく感じました。国際学生会議のテーマでもある「世界平和」の達成のためには、異文化理解が欠かせません。そのためにはまず、自国のことを知りつくし、それらを伝えられる力が必要です。事前研修旅行に参加する度に痛感していましたが、まだまだ足りない部分があると実感させられました。このことを成長する可能性が広がっていると前向きにとらえ、チャレンジする気持ちを大切にしていこうと思います。

国内参加者全員がそれぞれ目標をもち、積極的に取り組んでいる姿には心を動かされました。一日一日が濃厚なプログラムになっており、新しく出会った仲間たちと京都を満喫することで、最高の思い出をつくることができました。プログラムが終わったときの疲労感は決して悪いものではなく、満足感あふれるものでした。

この3日間は、1年生の頃からの成長や京都支部全体の成長を感じることができ、そして自分自身の新たな課題を発見する貴重な経験となりました。このような経験ができたことに大変感謝しております。京都事前研修旅行を機に始まった充実した学生生活を、京都事前研修旅行で締めくくることができ幸いです。ありがとうございました。

《日程》

8月20日：施設にて自己紹介・レクリエーション、清水周辺を散策、高台寺観光

8月21日：施設にて自己紹介・レクリエーション、太秦映画村観光

日本食作り（たこ焼き・餃子・焼きそば）、記念色紙づくり、宿泊

8月22日：二条城観光（ミッションゲーム）、茶道体験

8月23日：京都水族館観光、公園にてピクニック、移動

岡山支部 総括

実行委員長 田渕志帆

今回の岡山事前研修旅行にはインドネシアから3人、イタリアから1人、カナダ在住中国人の方1人の、計5人の外国人参加者、約40名の国内参加者が参加してくださいました。

今年の岡山事前研修旅行のテーマは「岡山に来にゃおえりゃーせまーが！」でした。これは、岡山弁で「岡山来ないとにいけないでしょう！来るべき！」という意味で、さらに“岡山で感じられる日本の夏休み”を前面に押し出したプログラムにしようと実行委員とともに創り上げてきました。「阪神や京都、九州に比べて海外参加者の目を引くような観光物がない岡山の、どうしたら海外参加者の方々が日本に慣れ、もっと興味をもってもらえるのか。岡山だからできるものを企画したい」この思い一つで実行委員9人とともに半年間、毎週企画会議を繰り返してきました。また、この実行委員の思いが国内参加者の自国の良さ再認識と国際交流への関心の高まりへと繋がってほしいと願っていました。

当日は、ウェルカムパーティーからはじまり、手押し相撲や似顔絵描き対決を行った際に、チームの友人を共に応援する姿から参加者同士が打ち解けていく様子が見ることが出来ました。また、宿泊企画では夕食に和食作りを体験していただいたり、夜には温泉を楽しむ様子や各部屋に海外参加者も国内参加者も男女問わず集い、会話を楽しむ様子がうかがえました。2日目は岡山にある日本遺産の旧閑谷学校で講堂研修を行い、刀剣資料館見学を行うなど日本の歴史や和に触れてもらう機会を設けました。最終日にはキンビール工場見学や、後樂園・岡山城訪問など、岡山の観光地巡りを行いました。

今回の事前研修旅行を通して、たくさんの人々と関わり、多くのご支援をいただきました。3日間を通して、各場面で参加者の笑顔が多く見られたことを、私たち実行委員10人全員、とてもうれしく思います。海外参加者の方にも別れの際に「みんな家族だよ」と涙してもらう場面もあり、国境・言語の垣根を越えて人がつながっていくあたたかさや素晴らしさを、身をもって感じる事が出来ました。参加していただいた皆様、これまでに関わってくださった国際学生会議の実行委員の皆様や関係者様に変感謝いたします。

岡山事前研修旅行参加者の声

友澤祐太

私は今回、岡山事前研修旅行に Day1～Day3 に参加をさせていただきました。まずは大変有意義な研修旅行であったことをご報告させていただきます。

今回の研修旅行のコンテンツとして宿泊企画や料理企画があり、尚且外国人参加者が 5 人と比較的身近な距離でコミュニケーションをとることが可能でした。その中で私は彼らが日本の文化に親しみつつも、自国の宗教や習慣をきちんと重んじる姿勢を垣間見ることができ、とても貴重な時間を過ごせたことは間違いありません。例えばインドネシア人の学生から「後で葉っぱをとって川に流す時間があるかい？」と言われ一瞬意図を理解出来なかったのですが、これは「母国に自分は元気にやっているよ！」と報告をするインドネシア独特の風習らしく、他にも一定の時間になると、神様に感謝の意を表すためお祈りを捧げるなど、比較的宗教色が薄い国家である日本では中々見ることができない異文化性を外国人参加者とのやりとりで体感できました。

私は今回で 3 回目の事前研修旅行参加となるのですが、その中で、外国人参加者はお箸の使い方や閑谷学校の講堂研修における「正座」にはやや苦戦を強いられていたものの、上記したこと以外では生活や文化の違いをほとんど感じ得なかったのが正直な感想です。これは思い返してみれば過去に参加した研修旅行にも当てはまることであり、例え言語の壁や国家間の距離は離れていても、人と人との間では何かしらの共通する生活や文化、そして優しさや人を気遣う姿勢などの感情が根底に存在しているのだと感じ得ました。そう言う意味では、これが今回の岡山研修旅行で得た一番の発見であるかもしれません。

そして、今回の事前研修旅行では刀博物館見学や閑谷学校の講堂研修で「日本社会の歴史」を知ってもらう一方で、ビール工場見学において質にこだわる日本のお酒を試飲し、実際の「日本社会の現在」を体験して貰うなど、過去と現在を体感する構成であったと私は考えています。視覚だけではなく、直接物事に触れることによって外国人参加者だけでなく、日本人参加者にも何らかの新しい自国に対する気づきというのを得たのではないかと思います。

最後になりましたが、国際学生会議の事前研修旅行担当者様、岡山支部研修旅行の実行委員の方々、ならびに関係者の皆様本当にありがとうございました。

《日程》

- 8 月 20 日：ウェルカムパーティー、宿泊(和食作り・温泉入浴など)
- 8 月 21 日：旧閑谷学校での講堂学習、長船刀剣資料館見学
- 8 月 22 日：ビール工場見学、岡山市内グループワーク、後樂園・岡山城訪問
フェアウェルパーティー

九州支部 総括

実行委員長 長野さくら

今年の九州事前研修旅行は、ベトナム、ブルガリア、インドネシアからそれぞれ3名の海外参加者を招いて開催されました。また、例年より多くの国内参加者にお越しいただきました。この結果は、九州支部長が、全国代表者会議やそのほかの全国規模のプログラムに積極的に参加したことが大きいのではないかと思います。九州は、やはり関西や関東から行くには交通費も時間もかなりかかります。それでも九州に行きたい！と申し込んでいただいた国内参加者に、時間とお金をかけてでも九州に来てよかった、と思ってもらえるような事前研修旅行にできるか、ということが、今回の事前研修旅行の大きなネックでもありました。

また、1年生にとっては他支部の方と一緒にプログラムに参加するのも、海外参加者との交流、そして「おもてなし」をメインに活動するのも今回が初めての試みです。海外参加者を楽しませる雰囲気は、私だけの力ではどうしても作り出せません。参加者、特にホームステイのホストは海外参加者と良い関係を築けるか、ということも大きな不安材料の一つでした。しかし、そういった心配は必要なく、今年の1年生は、私たちが1年生のときに参加した事前研修旅行と比べて、はるかに海外参加者とも国内参加者とも仲良くなれていたことがとてもうれしかったです。

また、私が自分の仕事で精一杯で、どうしても手の回らない部分は、実行委員だけでなく参加者のみなさんが、企画外で観光や食事会を仕切ってください、海外参加者を飽きさせない雰囲気作りにご協力いただきました。その時、今年の九州事前研修旅行のテーマである「みんなでつくるST」を達成できたように思いました。昨年とやり方が大きく違うこともあり、戸惑うことばかり、いろいろな方に指摘いただいていたばかりの半年間でしたが、事前研修旅行の実行委員長を務めることができ、本当によかったです。

準備の段階では、実行委員内で意見がぶつかったり、当日は天候にもあまり恵まれなかったり、最後までいろいろなことがありました。私の準備不足、運営力不足を含めて、反省点は多く残りましたが、参加していただいたみなさんに「九州に来てよかった」と、感謝の言葉をいただいたこと、そして何より写真に写るみなさんの笑顔を見て、半年間がんばったかいがあったと強く実感しました。また、この経験を、自分の今後の生活にも、次の代の事前研修旅行にも活かしていこうと考えています。参加していただいた方々、実行委員はもちろん、国際学生会議の実行委員のみなさん、壱岐島のみなさん、たくさんのアドバイスをいただいた先輩方、九州事前研修旅行に携わる全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

九州事前研修旅行参加者の声

有賀大輔

僕が九州 S Tに参加したきっかけは、僕の友達が実行委員をやっているからと言う単純な理由と今までに九州に行った事がなかったので行きたいと思っていたからです。

結果から言うと、この九州 S Tに参加してほんとに良かったと思います。

そう思った理由が大きく 3 点ほどあります。

まず、1 日目の内容が、スポーツ大会だったので、初めての人ばかりでしたが、コミュニケーションに悩む事なくスタートできました。むしろ、積極的に話せる雰囲気を作られていました。スポーツ大会の内容は、二人三脚、ミッションリレーなどで、僕は高校の体育会ぶりぐらい必死になって運動をしました。そのおかげで、参加者全員とお互いに笑える共通の話題ができて、スポーツ大会が終わった後には、積極的に話しかけにいました。

2 つ目は、がっつり国際交流させて頂きました。九州 S Tにきていたのは、Elena, Ha, Neta の三人と比較的少ない人数でしたが、逆にしっかり一人一人としつかりとした国際交流ができました。やはり今回の研修旅行で思ったのは全日参加の方が絶対に良いということです。これは、国内、海外参加者どちらにとってもメリットが多いと感じました。僕も全日参加したおかげで、この 3 人と仲良くなり、S Tが終わった後も連絡を取り合える仲になりました。

3 つ目は、九州支部のみんなで協力し合う家族のような姿を見る事が出来たことです。僕たち他支部から来た人達は、九州支部の下宿生の家に泊めてもらいました。九州は、下宿生が多く親元から離れて生活している人が多いので、先輩達がまるでお母さんのように後輩の心配をしてあげていました。この 3 つ目は、九州 S Tとは直接的には関係はないですが、他の支部では、実家生が多くあまり見られなかったので、九州支部の特徴で単純に面白いなと思ったので書かせてもらいました。この部分の九州支部の良い所だと思います。日本人の僕たちでも、心温まったので、外国人の人達から見たらリアルな学生生活を見る事出来る良い機会になったのではないかと思います。

最後に九州 S Tメンバーにお礼を言いたいです。このような、素晴らしい S Tを作って頂いてありがとうございます。作るまでには大変な苦勞があったと思います。でも、その苦勞以上に最高の経験をさせてもらったと思っています。また、他支部から来た僕たちと話しする機会があって、九州 S Tメンバーを見つけたら、走って話に行くとします(笑)

長くなりましたが、これで僕の感想を終わらせてもらいます。最後まで読んでいただきありがとうございました。

《日程》

8 月 20 日：開会式・手巻き寿司・スポーツ大会

8 月 21 日：海水浴・すきやき・スイカ割り・花火・飲み会（長崎県壱岐島に宿泊）

8 月 22 日：勾玉づくり・遺跡公園散策・壱岐牛バーガー・フェアウェルパーティー

第 4 章 本会議

全体総括

各分科会報告

分科会総括

各プログラム報告

全体総括

副実行委員長 吉田恵美

第 61 回国際学生会議は『異文化理解による平和への貢献を』という総合テーマの下、9 日間という日程での開催になりました。日本にとって戦後 70 年といった節目の年ということもあり、いつも以上に平和を意識した年となりました。活動の中心となる分科会に加え、日本文化体験や研修旅行、各種パーティーなどのプログラムをたくさん盛り込み、その中にも「平和」を意識して準備をしてきました。3 日目、4 日目で行った企画では、テーブルの枠を超えて異なる文化を持ち合わせる者同士がお互いを知る有意義な時間を作ることができました。

今年度は副実行委員長、企画部の設置、例年より 1 日延長しての本会議日程、広報の見直しなど、昨年の反省等を踏まえ様々な取り組みをしてきました。どれも簡単な事ではありませんでしたが、実行委員各自が国際学生会議をより良いものにしたいという思いから行ってきました。

本会議最終日を迎えるまでは、参加者に本当に満足していただけているのかなどといった不安を抱えていました。実行委員が発足してから今日まで、様々なことができました。実行委員、参加者共々、楽しいことではなかったはずですが、しかし、成果発表会終了後の達成感にあふれた表情、閉会式での参加者、実行委員の涙、たくさんの笑顔を見ることができました。また、本会議が終了した後にも続く参加者、実行委員の交流を見ている、ここまでやってきたことの意義を強く感じています。

副実行委員長として至らぬ点も多々あったと思いますが、今年度の反省を踏まえ、今後の国際学生会議がより良いものになるよう、一層努力してまいります。

最後になりましたが、第 61 回国際学生会議を無事閉会することができたのは、本会議のみならず、企画段階から御理解、御支援、御協力いただいたすべての方のおかげです。さらに今回は、昨年以上の企業、個人の方々からの支援がありました。また、国際学生会議のみならず、国内には学生が運営する多くの学生会議団体が存在し、一緒に説明会を開催するなど、互いの活動の質を高めることができ、この国際学生会議がどれだけ沢山の方の支援を受け、ここまで続けてきたのかを改めて実感いたしました。60 回続けてきたこの国際学生会議の 61 回目に副実行委員長としてかかわることができたこと、参加者や御協力いただいた沢山の方々に出会えたことに感謝しますと共に、第 61 回国際学生会議に関わって下さった皆様に、心から御礼申し上げます。

以上を全体総括とさせていただきます。ありがとうございました。

テーブルⅠ

ナショナルアイデンティティ ～国際社会における形成、揺らぎ、維持～

テーブルチーフ：青島 莉奈

①議論の背景

近代国家成立後、世界は主に国家の枠組みで認識されるようになり、そこで暮らす人々も「国民」や「〇〇人」として自他ともに認識される機会が増え、今やそれはごく自然のことのように思えます。もちろん私たちはこうした社会制度の発達から数々の恩恵を受けてきたことは間違いありません。人々は国民として多くの場合義務を負う代わりに主権者として権利を行使し、統一された行政制度や合理的な司法制度等のもとで秩序立った社会を築いてきました。また自国以外の国との政治的・経済的・文化的な関係が増加するにあたって、国民国家の枠組みは他国・他国民との区別を明確にし、相互の関わりを制度的に円滑にする為にも大きな役割を果たしたことは事実であり、今後もこうした秩序体系が維持されることは必至であると考えられます。

しかし近年のいわゆる「グローバル化」の進展により国民国家の枠組みを越えた人、もの、情報の実質的な動きは活発になりました。今や政治的、経済的繋がりだけではなく文化、生活様式に至るまで、より幅広く深い関わりが世界の多くの場所で起きていることは事実と言えるでしょう。それは今までの国民国家の既存の枠組みを越えて、目に見える形では物理的に、目に見えない形では心理的に人々に影響を与えています。それはナショナルアイデンティティというテーマの側面から見れば、人々が制度化された「国籍」という一種のアイデンティティを保ちながら、グローバル化によって生活環境や他の社会的要因から影響を受けた帰属意識や共同体意識といった内面的なアイデンティティは多様化・複雑化し、それらが流動的に絡み合って一致したり乖離したりしながら影響を与え合う世界に私たちは住んでいるということです。

このような世界で形成される人々の「ナショナルアイデンティティ」とは、決して確固たる固有のものではなく、流動的で、実体がなく、不明瞭な概念であることがほとんどです。また多くの人々がこのような概念を耳にする機会、または問題として再考する機会もあまり無かったのではないのでしょうか。こうした背景を考察し、あえて私は、世界各国の学生たちの柔軟で多様な視点を取り入れた議論と、より多くの人々が問題を再考するきっかけになる発表を目指して「ナショナルアイデンティティ」をISCのテーマの一つとして掲げました。

②議論の具体的展開

まず、なぜ今までこれほど「ナショナルアイデンティティ」の問題は議論されてこなかったのかを考えると、その理由の一つに定義の曖昧さがしばしば挙げられます。そこでテーブル1の議論でも、文献や本の定義を参考にしながら、自分たちの考える「ナショナルアイデンティティ」とは何かを決めるところから始めました。そこから限られた時間内での議論のため一点目に参加者の興味関心を中心にする、二点目に極力多くの国のケースを見ることを考慮しながら、個人、集団、国家レベルで起こるナショナルアイデンティティの問題や実害を挙げていき各ケースの分析を進めました。次にそれらの原因の分析における重要なファクターとして)「ネーション」の存在意義、2)情報選択のプロセス、3)アイデンティティ形成における「自己」と「他者」の存在を挙げ、それぞれの正の側面と負の側面を分析した後で、解決策の提案として負の側面への打開策またはその解決へのファーストステップの提案を目指しました。

③事前活動内容

8月末の本会議へ向けて、国内参加者は直接顔を合わせて計3回、海外参加者は Skype を用いて計2～3回、各々事前課題をこなしながら準備をしました。事前活動の主な目的は、一つ目に議論の中心となる基礎知識や概念の理解、またテーマに関する自らの興味関心を深める機会を確保すること、二つ目に習得した知識や理解を他の参加者に共有し、クリティカルな視点を加えながらテーブルとしての理解を構築していくことです。特に海外参加者に関しては本会議まで直接会うことは出来ないため、国内参加者とのペア Skype、国内参加者による報告を実施してより彼らの意見を反映しやすい環境作りに努めました。

<参加者招集会>

7月4日～5日にかけて国立オリンピック記念青少年総合センターで行なわれた参加者招集会は、テーブル1の国内参加者全員が集う機会となりました。テーマに関する到達目標として一つ目に「ナショナル」アイデンティティについて議論する意義をつかむこと、二つ目に近代国家成立の実例を理解することを掲げ、事前課題として一つ目に「国」を表す英語の使い分け、二つ目に近代国家としての日本についてのプレゼンテーションを作成しました。招集会で直にテーブルメンバーと意見を交わす機会を享受しながら、改めて自分たちが住む近代国家、ネーションとは何かを再考し、また日本、世界各国の事例はどうなのかと興味を深め、今後の本会議準備へのスタートを切りました。

<第1回事前勉強会>

第1回事前勉強会は、7月26日(日)京都にて行いました。事前課題は、一つ目にペアの海外参加者と Skype を実施し参加者招集会での議論内容の伝達・意見交換を行なうこと、

二つ目にテーマに関する自分の興味がある具体例や概念を調べ、プレゼンテーションを作成することでした。参加者はそれぞれ在日朝鮮人、ハーフ、帰国子女、エスニシティとネイションの概念についてなど各興味分野に関する発表を行ない、主に「ネイション」と「アイデンティティ」との関わりについて言及しながら、これらの実例がどのようにテーマに関わっていくかについて議論を深めました。

＜第2回事前勉強会＞

第2回事前勉強会は、8月19日（水）東京都内で行ないました。本会議前最後の事前課題として、ペアの海外参加者と情報共有を行う Skype に加え、一つ目に「アイデンティティ」とは何か（自分たちはどうとらえていくか）、二つ目に「グローバリゼーションとインターナショナル化」の概念の使い分けについて調べ、プレゼンテーションにまとめました。本会議への知識補強のために、アイデンティティに関する基礎的な知識と、現代社会の実情を表す二つの概念の整理を行い、ナショナルアイデンティティが孕む問題点を学問的な視点から考察するための土台を固めました。また今回は、陳天璽様代表の「無国籍ネットワーク」様のご協力を賜り、

座談会という形で実際に日本に暮らす無国籍者の方々から彼らの経歴や「ナショナルアイデンティティ」についての考え方をお聞きする時間も設けることができました。このようなフィールドワークの機会を設定した理由は、議論を進める上で性質上どうしても理論的な話に終始しがちですが、自分たちが議論していることは現実社会と密接に関わり合っており本や文献から



の情報に加えて現場の声を聞いて対象を考察することも重要なプロセスの一つだということを、参加者にもそしてテーブルチーフとして自分自身も意識して取り組んでいきたいと考えたからです。実際に参加者からは「理論的に学んだ目指されるべき理想の社会はやはり現実とは離れていて理想的すぎるのではないかと感じた」「ナショナルアイデンティティはどこに存在するのか、改めて考え直すきっかけになった」など、彼らが問題をクリティカルに考察する良いきっかけになったのではないかと考えています。改めてこの場をお借りしまして、ご協力いただいた無国籍ネットワークの皆様には厚く御礼申し上げます。

④本会議内容

◆分科会1・2【導入、定義決め】

本会議は国内参加者と海外参加者が初めて一堂に会するタイミングのため、まず始めに少しでも議論において率直に質問しやすく自由に意見を交わしやすい雰囲気作りを目指しました。具体的には分科会1の前日を使って、メンバー同士が自然に知り合えるようにまた会話がはずむように、「自己紹介マトリックス」というアクティビティや、誕生日や名前を使ったジェスチャーゲームを行いました。自己紹介も兼ねたアクティビティということで、参加者もテーブルメンバーと知り合えて緊張が解けた様子でした。

分科会1からは、本格的な議論に入りました。スタートアップとして、また本会議全体の見通しを立てる重要なポイントとして、分科会1では二つのことを話し合いました。一つ目は各参加者がこのテーブルを選んだ理由、それを話す際に参加者の根底にあるテーマに対する問題意識は何かを言語化して共有すること、二つ目はテーブル1のメンバーが考える「ナショナルアイデンティティ」の定義は何かということです。まず一つ目の問題意識の共有に関して、これを導入として行なった理由は、まず問題点の核が明確になっている参加者にとってはそれを他のメンバーにも共有するため、そしてまだ自分の問題意識のコアが明確になっていない参加者にとっては、彼らが普段何気なく感じている「何かしっくりこない」出来事や「気になる」事例を共有し他のメンバーの視点も加えながら言語化するプロセスを経験すること、またその何気ない問題意識の中に問題解決への重要な鍵が隠されており、それに目を向け、本会議を通して追求することの重要性を実感してもらいたかったからです。実際に短い時間の中でも参加者一人一人がテーマに関する自分の問題意識を、大学の専門分野、経験、知識、自分自身と絡めながら語り、質疑応答が飛び交う活発な意見交換の時間になったため、導入として参加者のテーマへの関心を一層高める役割を果たせたと思います。



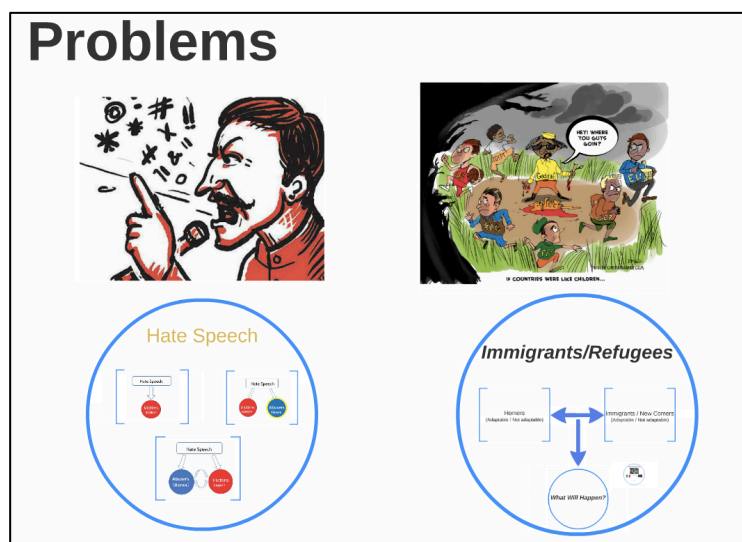
次に、「ナショナルアイデンティティ」の定義を決めるプロセスに入りました。定義決めに議論の一番始めに置いた理由は、後の議論で不必要な誤解や相互不理解を避けるため、「ナショナルアイデンティティ」という広い意味でどのようにも解釈されうる言葉の定義を参加

者の中で摺り合わせ明確に言語化しておく必要があるからです。「ナショナルアイデンティティ」に関する議論は、個人によって「捉え方」や「考え方」も様々なため、議論対象である言葉自体はテーブル内で統一し、同一の定義に対する多様な意見を比較することが求められます。従って、テーブル1では議論の最初に「ナショナルアイデンティティ」の定義を話し合いました。プロセスは、まず「ネーション」「アイデンティティ」とは何かを事前課題にて調べた文献や資料をもとに明らかにし、次に「ナショナルアイデンティティ」が含む要素や構造を挙げていくことで全体像の把握に努めるという流れでした。一つ目の「ネーション」と「アイデンティティ」について、前者はまず近代国家成立後の世界を前提に、そのプラスの側面とそれに伴って起こる問題のある側面をポストイットで挙げていき、最終的に自分たちが解決策を提案する対象として、問題となる側面に焦点を当てていきました。具体的にはベネディクト・アンダーソン著『想像の共同体』も引用しながら、ネーションの、実社会に存在感を表しながらも「想像された」「虚構的な」性格を持つという点を取り上げました。「アイデンティティ」に関しては、形成段階の重要なファクターとして必ず自己だけでなく「他者／社会」の存在もあること、そのような周囲との関係から自己認識、自己統一を図る行為の過程又は結果の一つであることが指摘されました。そして最終的に「ナショナルアイデンティティ」の定義に入りました。これは非常に曖昧且つ不明瞭な言葉のため、参加者同士で何度も意見を交わしたり再考したりしながら、納得のいく定義が提示できるようにテーブル全体で注力しました。結果として、「ナショナルアイデンティティ」とは、ある集団や個人が、そのアイデンティティ形成段階で「ネーション」と関わりを持ち、意識的にせよ無意識的にせよ、それらの相互作用、つまりは彼らと「ネーション」との関わりの中で自己を認識する状態のこと、と定義しました。

◆分科会3・4【テーブルへの具体例のシェア】

「ナショナルアイデンティティ」の定義が固まり、次はテーブル全体へ、各参加者が興味のある具体例の共有に移りました。彼らの問題意識のおおまかな共有は分科会1の導入の際にしているため、今回はより学問的な視点を取り入れながらテーマとの具体的な関連性を言語化することを目的に行いました。この段階で学問的観点を取り入れた理由は、参加者の関心分野を自身の主観的な問題意識として留めるのではなく、社会の問題意識に関連させることでより客観的な視点を取り入れその重要性や説得力を増すためであり、テーマとの具体的な関連性を言語化するようにした理由は、「ナショナルアイデンティティ」の問題として挙げられる具体例は例えば人種差別問題など、近似した分野に関連する複雑な問題であることが少なくないため、テーブルの議論にとってはどの部分がこのテーマに関わる重要な問題意識かを明確に指摘しておくことは後の議論の方向性を保つために必要だと考えたからです。参加者から出た事例は具体的にヘイトスピーチ、在日朝鮮人、帰国子女、ハーフ、ミシェル・ビリングが唱えた”平凡なナショナリズム”、多民族国家としてのインドネシア、移

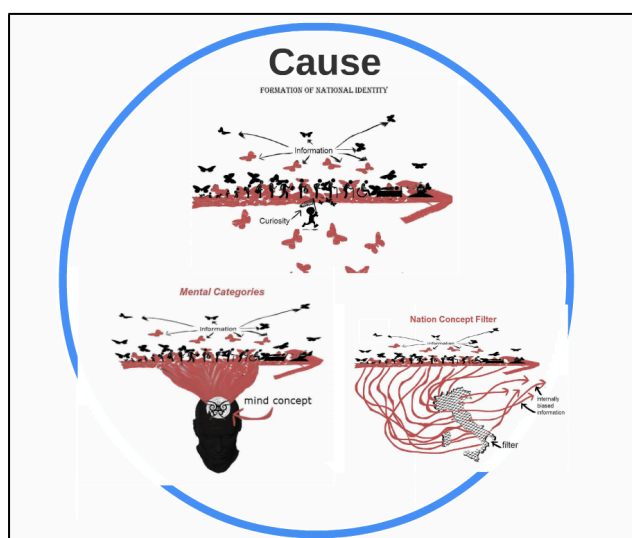
民社会、国の偏った”イメージ”など多くのトピックが挙げられました。これらのどれもが最初に提示した定義のもとで議論されうる問題であり、その影響は実体として目に見えるものもあれば、目に見えない心理的なものとして言及されることもしばしばありました。またこれらの中で多く言及された問題となる構造が、一つ目に「国籍」と「ナショナルアイデンティティ」の混同により起こる問題、二つ目に自己認識としての「ナショナルアイデンティティ」の受け手となる社会の側の認識とのずれにより起こる問題でした。一つ目を問題点とした理由は、国家と国民/個人という、ある程度の共通の背景を持ちながらも完全には一致しない二つのファクターを考慮する際に、人は両者の性格は一致しているはずだと無意識に見なす傾向があり、そのことが国籍に関わらず個人の生活やバックグラウンドの多様化が進む現代社会にそぐわなくなっていることが、ある個人や集団の「ナショナルアイデンティティ」に揺らぎを与えることがあると考えたからです。二点目は、一点目を掘り下げた形になりますが、「ナショナルアイデンティティ」の問題は当事者の内面へのアプローチだけでは根本的には解決せず、常に社会の側からの認識によっても影響を受けるため、例えば当事者の中で自身の「ナショナルアイデンティティ」に何らかの答えを出したとしても、社会からの受け入れや認識に変化がなければ再び「揺らぎ」を経験せざるを得ないという構造に着目し問題点として挙げました。このようにして、参加者から挙げられた様々な問題から抽象化した問題構造を抜き出し、身近な問題意識からより普遍的な問題点を提示するプロセスを経ました。



◆分科会 5・6【原因の洗い出し/選択】

分科会 3、4 の問題分析の段階である程度抽象化した議論が展開されたため、それらを引き起こす原因を洗い出していくことにテーブル全体としてさほど時間はかかりませんでした。しかし一般的に、ある問題を解決するにあたり最終的に「重要度の高い」原因にアプローチをすることは非常に重要であるため、分科会 5、6 では、挙げられた原因の中でどれが「重要度の高い」原因になるかについて、テーブルの総意を得ることに注力しました。分科会 3、4 での具体例の分析の際に、二つの問題点を指摘してあったため、それらが起こる原因について考えました。問題点の一つ目は「国籍」と「ナショナルアイデンティティ」が重層化している現状を見過ごすこと、二つ目は当事者と社会の「ナショナルアイデンティティ」の再認識へのアプローチのバランスが取れていないことです。そしてテーブル 1 では最終的

に、それらの問題を引き起こす重大な原因の一つとして「情報」に着目し、それを事実・出来事などの内容・様子そのものを指すものとしての「情報」と、何らかの形で意見や見方が加えられて伝達される「情報」の二つに分類し、とりわけ後者を重視しました。なぜなら、問題として挙げた二点にはある国家や国民に対する固定観念や偏見といった概念が深く関わってきますが、それらが形成されるのは後者の「情報」を鵜呑みすることにより起こると考えたからです。ここから更に分析を加えていくにあたり、後者の、ある意見や見方を加えて伝達される「情報」を二つに分類しました。それは外部的に操作されるものと、内部的つまり自ら無意識のうちに現実とは異なる偏見を加えて認知するものです。一つ目の外部的に操作される情報とは、例えばニュース、新聞、ラジオなどのマスメディアが具体例として挙げられます。その特性上、意図的であるにせよないにせよ、マスメディアによって伝えられる情報は前もって取捨選択され、編集され、表現方法が工夫されています。テーブル1のテーマである「ナショナルアイデンティティ」に関して言えば、ある国や国民のイメージがこうした外部により操作された情報から形成され、固定観念や偏見に繋がる可能性があるという議論になりました。また二つ目の「内部的な操作」では、ミシェル・ビルングが”平凡なナショナリズム”の概念で提唱するよう



な、人々の無意識の中にまで潜む近代国家としての「ネーション」の存在に影響されて組み立てられる思考回路のことを指し、たとえ外部からの情報に意図的な操作がない場合でも、自己の内部に潜む”フィルター”が存在する限り「ネーション」に関する情報には何らかの操作が組み込まれている可能性があるということを議論しました。以上から主な原因として、「情報」の中でも特に外部操作された情報と、内部からバイアスをかける情報に着目し、それらに対する解決策を考えていくことにしました。

な、人々の無意識の中にまで潜む近代国家としての「ネーション」の存在に影響されて組み立てられる思考回路のことを指し、たとえ外部からの情報に意図的な操作がない場合でも、自己の内部に潜む”フィルター”が存在する限り「ネーション」に関する情報には何らかの操作が組み込まれている可能性があるということを議論しました。以上から主な原因として、「情報」の中でも特に外部操作された情報と、内部からバイアスをかける情報に着目し、それらに対する解決策を考えていくことにしました。

◆分科会7・8【解決策・提案の話し合い】

先にも述べた通り、「ナショナルアイデンティティ」の問題がカバーする分野は幅広く、解決策を考えるにあたっても様々なアプローチ方法が可能になるため、まずは誰を対象に、どの観点から解決策を提案するかについて話し合いました。対象は、国家、政府、企業、地域社会、個人などと様々な規模と形態があり、観点についても社会制度改革を目指した提案、人々の心理・認識変化を目的とした提案などが考えられます。テーブル1では最終的に、個々人に対して彼らの意識や認識の変化に働きかけるようなアプローチ方法を提案することに決めました。なぜなら参加者は皆「学生である」ことが前提で、その「学生」が集まること

の面白味は、新鮮で柔軟性の高い視点やアイデアを社会に提供できることであり、それは最終プレゼンテーションにて人々の心理的、認知的部分に働きかけることで表現することが出来るのではないかと考えたからです。従って、以上で述べた「ナショナルアイデンティティ」の問題を引き起こす主な原因である「情報」の処理・取捨選択について、人々の意識や認識ベースでアプローチできる方法について話し合いました。最終的には二つのポイントにまとめました。一つ目は「情報」を能動的に取得する意欲や動機を得ること、二つ目は得た「情報」に対して客観性を保つためにクリティカル・ティンキングを常に行うことです。これらを提案するに至った過程は、例えばコロンビア出身の参加者の例を用いると、「コロンビアは危険な国だ」「コロンビア人は麻薬を使っている」という固定観念やイメージを周辺諸国民から抱かれることが多いが、実際のコロンビアは必ずしもそうではないという現状があり、それは「実際のコロンビアを見てみ

よう、知ってみよう」という意欲・動機や、耳にした情報を批判的に考察するプロセスを省いているからだ」と指摘していた例や、他にも近代国家成立以降人々の無意識の部分にまで根付いたある国や国民に対する“イメージ”を、その真偽を疑うこともなく受け入れているという受動性、またそれが「グローバル化」が加速する現代社会において国境を越えて



自己や他者を認識したり評価したりする際に大きな影響を与えているという見過ごしがちな現状を懸念した話などが挙げた背景から、以上の二点を提案するに至りました。

これらの例は議論で出た具体例のごく一部ですが、それまでに挙げられた問題点の具体例の多くにおいて、一つ目に「情報」を能動的に得る意欲や動機を持つこと、二つ目にクリティカル・ティンキングつまり「情報」の批判的分析により客観性を保持することが問題の打開策になると言えます。例えば日本で言えば、隣国の韓国や中国に関するある偏った意見に基づいた「情報」をニュースで得たとしたら、日本語以外の情報源や他の複数の情報源を参照して、その真偽や客観性を確かめようとする意欲を持つこと、また批判的思考により受け取った「情報」に影響された偏った見方になる傾向を防ぐことで、韓国や中国に対する一方的なイメージが無意識に形成される可能性を低くすることが出来るでしょう。もちろんこれらの提案は個々人の意識や認識の変化を目的としているため、問題解決の「第一歩」としての提案になりますが、これらの二つがより多くの人々によって達成されることは、現状人々が持つ「ナショナルアイデンティティ」に関する固定観念や偏見による問題が起こることを防ぐのに有効だと言えます。従ってテーブル1では、個人や集団単位でのこのようなアクシ

ョンの数を増やしていくことが現状打開の鍵になるという結論に至りました。

◆分科会 9～12【スピーチ練習、プレゼンテーション作成】

最終日に行うプレゼンテーションは六つのパートに分け、導入、定義の提示、問題提起、原因提示、解決策の提案、結論という構成になりました。私たちは約一週間かけて議論した内容を、いかに 12 分という限られた時間の中でオーディエンスにとって分かりやすく伝えるかということに重点を置いていたため、まず始めにスピーチ原稿を書き上げ発表し合い、一点目にオーディエンスの立場になって内容が理解できる言語表現をできているかということ、二点目に論理的に六つのパートが繋がりが合って理解しやすい流れになっているかということを確認するところから始めました。何度かスピーチ原稿を書き直し発表し合う作業を続けた後、そのスピーチを補強する形でプレゼンテーションを作成し始めました。テーブル全体の総意として、イメージ図やグラフを用いて説明を言葉で加えていくプレゼンテーションの構成にすることを意識しながら、一人一人が担当箇所のスライドを作成しました。特に「ナショナルアイデンティティ」に関する発表としてプレゼンテーションの内容で工夫したことは、最初の導入部分で在日韓国人、カナダ永住権を持った中国国籍の二人の参加者の自己紹介から始めたり、問題提起の部分で日本、韓国、イタリア、アフリカといった複数国の例を用いたりすることで、オーディエンスに「ナショナルアイデンティティ」の問題に対して当事者意識を持ってもらうこと、また一部の人々や地域だけでなく今や世界各地で起こっている問題であると感じてもらうことを目指して作成したことです。このようにして、ISC の魅力の一つである一般公開で来てくださるオーディエンスへ向けたプレゼンテーションを意識して作成し、最後にテーブル 1 が目指す、互いに受け入れ合う社会の展望を言及する形で発表を結論付ける構成に仕上げました。

⑤個人所感

ISC という世界各国、日本各地から多様なバックグラウンドを持つ人々が集まる場で「ナショナルアイデンティティ」について議論することは私にとって非常に興味深い経験でした。そもそもこのテーマを設定した理由は、私自身が日常生活において「日本人らしいって何だろう」と素朴な疑問を抱いていたことが始まりでしたが、そのような些細な問題意識の探求から、より普遍的で重要性の高い国際社会の問題発見へと繋がり、更に海外参加者はイタリア、コロンビア、インドネシア、カナダから、国内参加者は関東、関西各地から、実際に同じような問題意識を持った学生たちが集合し、約一週間の議論、そしてプレゼンテーションをするに発展したことは非常に刺激的且つ興味深い体験でした。この過程から学んだことは、誰もが何かしら持っているであろう、社会に対する些細な問題意識をそのままにしておくのではなく、言葉に表してみる、誰かと共有してみる、意見交換をしてみることは、その先視野を広げたり行動を起こしたりしていくために非常に重要且つ有益であるということです。

それはテーブル1でのディスカッション中にも特に意識して実践しており、例えばメンバーの誰かが「あれ？でもさ、…」 「これってこうだと思うんだけど…」 という些細な疑問や気づきのサインがあれば、それを汲み取ってその真意にある重要な問題提起を見逃さずに議論内容に活かしていく雰囲気大切にしました。そのような議論が展開される中で、メンバーの一人一人が、日々慣れない英語でも一生懸命ニュアンスや意図が伝わるように発言する機会が増え、それぞれが自分にしか出せないアイデアをテーブルに共有することの難しさとやりがいの両方を感じて、積極的に議論に参加していたように思います。もちろんその過程で、メンバーは国籍も、生まれ育った環境も、母国語も異なるため、意見が上手く伝わらなかったり、議論に納得できなかったりして、悩んだり苦しんだりすることは何度もありました。しかし、テーブル1のメンバーは議論中もそれ以外の時間も、常に互いを思いやり、受け入れ合い、もっとよく分かり合いたいという姿勢を持ち続け、個人的に話を聞いたり、相談し合ったり、意見を交わしたりして理解を深めていき、最後のゴールまで誰一人欠けることなく走り切りました。そんな彼らの姿勢を尊敬し、誇りに思います。また今回のISC61を通して彼らが貫いた姿勢や議論から学んだ視点を、この先活躍する場においても活かしていき、テーブル1が目指した互いを受け入れ合う社会の広がりにつなげていくことが、今後の私たちの責任であり役割であるでしょう。最後になりますが、約一年間様々な場面でご支援いただきました皆様、また共に多くの時間を過ごし支え合ってきた仲間々に心から感謝申し上げます。



*プレゼンテーション資料

<https://prezi.com/icirfd4d5hpt/untitled-prezi/>

テーブルⅡ

食の流通における安全と差別

テーブルチーフ：石井 智士

①議題の背景

普段から、健康を気にしている私にとって食の安全については、日ごろ気にしている事項です。以前、ドイツに滞在しているときに訪れたスーパーマーケットで印象的な出来事がありました。冷凍フィッシュナゲットが陳列された棚の中にラベルが貼られたものと、貼られていないものがありました。このラベルは安全検査が行われ一定の安全が確保されたことを示していました。安全性の観点でいえば安全性が確保されているラベル付きの商品が消費者の手に渡るのが普通です。この事象において、ラベルの貼られていない商品はどのようなものになるのでしょうか？ラベルがないから安全ではない商品になるのでしょうか？以上のように食の安全は当然と考える生活が一般になった世の中で、安全を証明していない食は不当な扱いを受けているのではないかと思い、提案しているテーマに興味を持ち始めました。

事実、世界中の安全性の差異により類似した事象が起こり、さらに流通の観点から考えれば、安全性の差異で国によって食が食としての価値を失っているということがありました。また国内での食の安全事象を見ていくと、安全基準が規制緩和されたり、規制強化されたりと安全基準が不透明であるように感じられます。特に放射線の問題が生じてからはいくつかの国が日本国内特定地域からの食物の輸入を禁止しました。対象食品が本当に危険であれば、そのような措置は当然だが、多くの地域で対象食品は消費されており、安全というものの信頼性がわかりにくくなっており、疑わしい安全(=suspiciously unsafe)があるように感じられます。

以上のようなことから、危険なものは除外されるべきだが、安全に対して敏感になったがゆえに生じた *suspiciously unsafe* が今日のグローバル社会における食の価値を左右する一つの事象として、重要だと思い、このテーマ選定をしました。

②議論の具体的展開

本会議前の時点では、参加者のテーマに対しての理解が 100%一致していなかったもので、テーマに関してのインプットと私が考えているテーマについての想いを参加者に伝えました。そのうえで、国内・海外参加者でペアを作りペアワークを行うことで、参加者間の仲を良くし、同時にテーマに関しての理解を深めました。

本会議入ってからは、全体でのテーマ理解とテーマに関しての情報を改めて整理するために、テーマに関しての現状を調べディスカッションするための下地をそろえました。インプットなしでテーマのディスカッションをしてしまうと空論ばかりが出てしまい、非現実的な結論を迎えてしまうため、私のテーマでは序盤ではリサーチを多く取り入れました。

続いて、得られた内容を基に現状の分析を行い、そこから見えてくる食の安全の欠点を見つけ出しました。その欠点に注目しながら、どのようにしたら食の流通において安全性が確保できるのか、またその安全性が信頼でき、あらゆる国が食の流通に参加できるのかを考えました。

そのプロセスを通して見えてきた現状の課題、求められる理想的な食の流通における安全、それを理想の姿にまで持っていくための方法を全体で考えていきました。最終的に、提案する解決策を導入することでどのようなことが起きるかを考え、ディスカッションで挙げたことを整理し、プレゼン作成へと移りました。

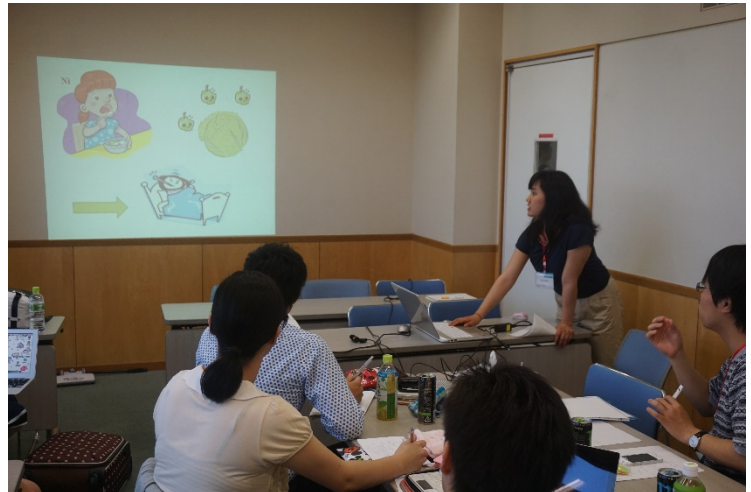
③事前活動内容

参加者決定後に国内参加者と海外参加者とでペアを組んでもらい、各活動前に課題を渡し、各活動での課題の取り組みシェアを行うことを意識してもらいました。

事前活動は参加者招集会の7月4日、5日、勉強会一回目を7月19日、勉強会二回目を8月11日、12日に行いました。

<参加者招集会>

参加者招集会初日では、国内参加者との初めての顔合わせということもあり、自己紹介や簡単なディベートを通して参加者、実行委員間の関係を深めるための活動を行いました。また、自分たちのテーマを進めるにあたって留意してほしいことや、昨年度、私が参加した経験を参加者たちにシェアをして、どのような姿勢でこの会議に臨むことが大事になってくるかを伝えました。



参加者招集会課題共有

二日目には、参加者がなぜこのテーマを選んだかを見るために「どの食に着目してディスカッションを行うか」と「これからの世の中で、**global food safety standard**を採用すべきか、国内の安全基準を採用すべきか」という課題を事前に出していたので、その課題に対しての取り組みをテーブル内で共有しました。

<第1回事前勉強会>

勉強会一回目では参加者招集会後に出した課題である「食の安全とは」の内容に関するシェアを行いました。また、勉強会二回目では後援として協力いただいているワタミ株式会社訪問でのフィールドワークがあったため、それに向けての準備として質問事項作成を行いました。

＜第2回事前勉強会＞

勉強会二回目初日では、ワタミ本社を訪問し、ワタミグループが運営しているワタミファームについての理解を深めることで企業・農業における食に対する安全の知見を広めました。企業訪問後には、企業訪問で得た知見を整理し、何が本会議で使えるかを再考しました。

課題共有を通して、私たちがこれから先のディスカッションでどのようなことを注目すべきかが徐々に参加者の間で明らかになってきました。



ワタミ本社訪問

勉強会二日目では勉強会一回目のあとに

出した課題である論文調査で得た知見のシェアと、どの食に着目し本会議でディスカッションを行うか、現時点で安全基準はどうあるべきものかをディスカッションしました。

以上の事前勉強会を行っていましたが、やはりテーマが食の安全ということで現状を知らない限りディスカッションができないということで、情報のインプットが多かったです。インプットした量が増えるたびに、参加者たちの食の安全に対する考え方が変化し、事前勉強会は本会議に向けて良いものになったと思いました。特に、フィールドワークをしたことで世界（国）と企業の間における安全に対する考えの違いが見え、企業と消費者との間でも、安全に対する考えの違いがあるということが感じられました。

④本会議内容

◆分科会1～3【現状リサーチ】

この段階ではテーマに関しての情報を集めるために、「現状の安全基準はどのようなものか」、「世界全体で見て、安全基準が高い水準にある国はどこか」、「世界で国際基準はどのようなものなのか」を調べました。

現状の安全基準はWHO(World Health Organization)やFAO(Food and Agriculture Organization of the United Nations)などが定める国際基準と各国が持つ国内基準があります。国際基準においては科学的根拠に基づいた安全基準を採用しており、その食の安全は「食物自体が人体に害を与えない保証」として定義されています。また、国内基準においては国によって安全水準が異なり、チェック項目数も異なります。しかし基本的に科学的根拠に基づいた安全を採用しているという文言が見られました。

安全基準が高い水準である国に関して調べてみると、オーストラリア、アイルランド、フランス、カナダなどが名を連ねていました。しかし、安全基準が高い水準をどのように決めているかを注目していくと、安全基準の高さ、消費者意識、政府の取り組みなどが評価基準になっており、安全基準そのものの評価を見ることは容易でないことが分かりました。

国際基準について調べていくと、いくつか驚くべき事実がありました。国際基準の例として CODEX について取り上げたところ、国によって、批准する安全項目数が異なっていました。また他の安全基準である ISO22000 では批准している団体数も国によって異なり、比較的、後進国や中国の批准団体数が多いということが分かりました。

以上のリサーチを通して分かったことは、科学的根拠に基づいている安全基準でも、現行の安全基準は国内と国際とで差があり、さらには国際基準があるとしても採用している国や団体数が異なり世界全体の国際基準としては実質機能していないように考えられました。また CODEX は比較的、多くの国(約 185 か国で採用)で認知されているため、CODEX が信頼でき、十分な安全を満たしていると人々は考えてしまうのです。これらの事象は、科学的根拠が保証されているに関わらず、消費者のイメージが先行してしまい、食に対してイメージによる安全が生まれてしまっているという疑問が生まれました。

また、食の安全に関しての具体的な事象を調べていくと、国によって安全基準が異なるために流通ができないことや、先進国の中でもアメリカと EU 間では安全基準が異なるから流通ができないといったことがありました。また、消費者視点での事象を見ていくと、食品の原産国やラベルによって購買意思が変わったりしてしまうことが起きています。

◆分科会 4・5 【現状に導入すべき安全基準を決めるためのケーススタディおよび安全基準の提案】

現状の問題に対して実現可能な安全基準を考えるために、規制強化したケースと規制緩和したケースを取り上げて、それぞれの事象を考えました。

表 食の安全の規制強化と規制緩和で生じる事象

規制強化	規制緩和
後進国が安全基準を満たせない	安全でない食の流通の可能性
基準を満たしたことを示す偽装	先進国間での独自の安全基準導入
安全基準を満たした食品の不足	
後進国間での独自の安全基準導入	
先進国による後進国への援助	
流通における経済格差	
流通界の 2 分化(先進国と後進国)	

規制強化により生じる事象はわずかな規制強化だけで、起きる事象が多いと考えられます。特に、後進国からすると、わずかな規制強化であったとしても、その基準を満たすだけでいくらかの労力が求められると予想されるので、実現は難しいと考えられます。また、実現できたとしても安全基準が満たされない食品が生じると考えると、安全基準を満たす食とそうでない食の 2 種類が生まれ、可食だけれども流通に適さないとされる事象が起こればと考えられます。そのような食が流通する場面としては、流通する世界が先進国と後進国とで二分化すると考えられます。

一方で規制緩和に関しては、大幅な規制緩和の場合に限り表にあげた事象が生じるが、先進国、後進国共々の妥協にあたる小さな緩和においては上記の事象は起こりにくいと考えられます。

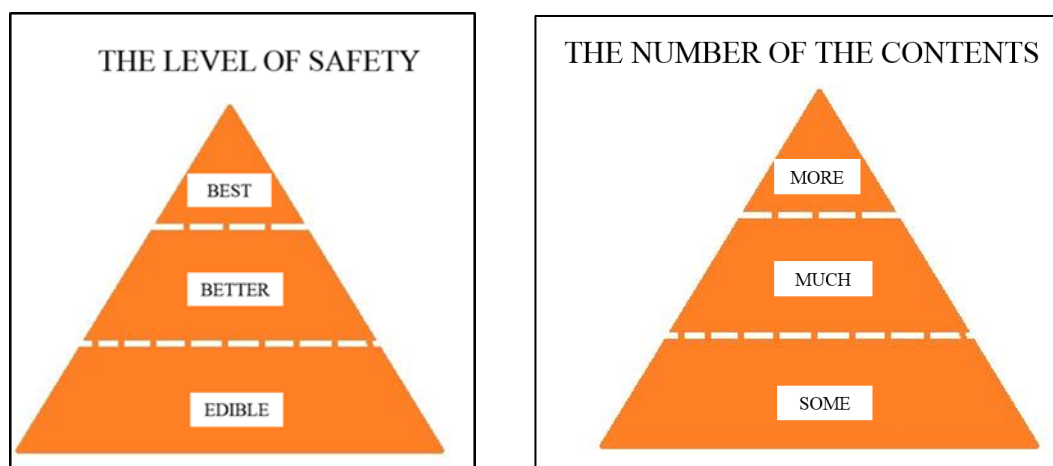
緩和の方法としては次のようなものが考えられます。安全基準値に関しては、先進国では数値などの規制緩和、後進国では規制をわずかに強化し、安全基準項目においては、先進国がチェック項目数を減らし、後進国がチェック項目数を増やすといったものです。これにより、先進国は若干の安全基準値と項目数の緩和をする必要があるが、先進国からすると大きな変化ではないと考えられます。後進国は安全基準値のわずかな強化と項目数の増加が必要となります。ここで重要になるのは基準値ではなく項目数の変化です。その理由としては安全基準チェック項目が増えることで、対象とされた食品がどれだけ調査されているかを証明できるため、安全基準信頼度の獲得につながると考えられます。

◆分科会 6 ～ 8 【具体的な提案策】

現状の不透明な安全基準に対して私たちが提案した案は次の通りです。

1. 国の間での安全基準の差を埋める
2. 第三者団体による監視
3. 人々の食の安全に対する認知

以上の3点が提案で、1つ目については、上記に挙げた安全基準と安全基準チェック項目数の妥協です。妥協をするだけでなく、安全基準と項目数で階級制を導入することで安全の信頼性の獲得を考えています。

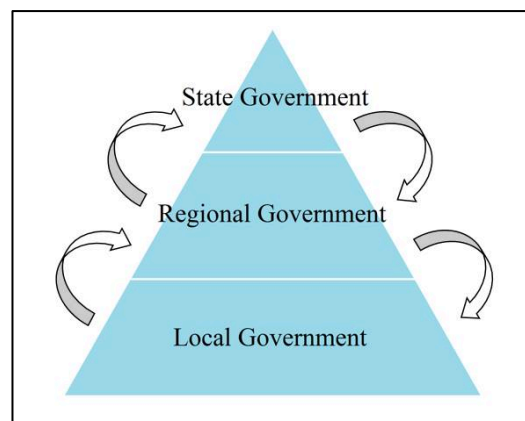


安全基準と安全基準項目における階級

安全基準を設けるうえで、先進国などが取り入れている厳しい値を満たせば「BEST」に、厳しい基準と規制強化をした後進国の基準の中間あたりを「BETTER」に、後進国の規制強化した基準を「EDIBLE」と区分けし、さらに対象食品がどれだけの安全基準項目数をチェックしているかで「MORE」「MUCH」「SOME」の区分けをします。

2 つ目については FAO などのような第三者組織が生産者から提出された項目数をチェックし上記の階級分けをし、評価をします。評価の仕方は下記の通りです。

安全基準が「BEST」で安全基準項目数が「SOME」だと信頼性はいくらかあるが、本当にその安全基準が良いのかどうかの証明にかけており、一方で「EDIBLE」と「MORE」場合は十分な信頼度があるため、食が食としての価値は十分に保たれているということを意味している。



第三者組織図

表 信頼できる安全基準の区分け

安全基準/安全基準項目数	MORE	MUCH	SOME
BEST	十分信頼できる 高水準	信頼できる 高水準	いくらか信頼 できる高水準
BETTER	十分信頼できる 中水準	信頼できる 中水準	いくらか信頼できる 高水準信頼 できる中水準
EDIBLE	十分信頼できる 基準	信頼できる 基準	いくらか信頼 できる基準

3 目の人々の認識については、イメージによる安全性の払拭を目指すためであり、人々にイメージによる安全性の認知をさせることを目指しています。現状でも安全に関する情報は調べれば手に取れますが、消費者が能動的にならない限りアクセスできない情報が多いので、消費者により安全に関する情報が行きやすくなることで、安全に対する姿勢が変わり、上記に挙げたシステムが大いに効果を発揮すると考えられます。

◆分科会 9 ～ 1 2 【プレゼン作成および質問作成】

◆分科会総括

現状の食の流通問題として私たちが取り上げたことは、世界全体での安全基準が異なっているということです。実例を見ていくと、国際基準で示されている安全基準に従っている国があり、また国際基準ではなく独自に厳しい安全基準を設けている国もある一方で、国の環境からして現状の世界の安全基準に従うことが難しい国もあり、食の流通の上では“安全基準”が流通を複雑化させているように思えます。国内では消費可能な食品でも、国外に輸出すると安全基準の観点から流通ができず、たとえ流通ができたとしても、原産国や加工国などといった情報からイメージによる安全性が生じ、食品差別が起きていることがある。食としての価値があるにも関わらず、安全基準が違ったり、正確な安全が人々のところへ示され

ていなかったりすることで、食が食としての価値を失っています。

以上の問題を解決するにあたり、私たちは一つの解決案を提案しました。「国の間での安全基準の差を埋める」、「第三社団体による監視」、「人々の安全に対する認知」の3点を達成、取り入れることで現状の問題に対して対策はできると考えています。

⑤個人所感

成果報告会を終えて、テーマに関しての考察できることがいくつかあったので報告します。テーブル2の私たちは、これからのグローバル社会には上記であげたような食の安全の確保を行うことで、食の安全基準に対して信頼度を持たせることができ、**suspiciously unsafe**と見なされた食が食としての価値を持つことができると提案しました。成果報告後にISCのサポートをしてくださっている石田寛様より、「世界で導入しようとしている安全基準は性善説に基づいているもので、生産者情報を開示して安全を担保している」というお話を伺いました。確かに、日本国内の野菜でも生産者の写真や情報が載ったものだと消費者としては手に取りやすくなるという傾向もあり、一部納得できる部分もありました。しかし、私個人の見解としては、GAPs(Good Agricultural Practices)が導入しようとしている性善説に基づく安全基準はイメージに安全に当てはまるのではないかという疑問を持ちました。テーブル2で提案した安全基準は、この案とは反対の性悪説からなるもので、安全に関する情報が組み合わさることで安全性が確保され、その安全基準の信頼度も正確になるというものでした。

いずれの安全基準が導入されようと、私はこれからのグローバル社会で、より多くの食が信頼できる安全を持ち、私たちのもとへ届くことを願うばかりです。

ISCを通して、私自身気付いたことが2点あります。1点目はこれからの世の中を担う若い世代の力強さです。昨年、参加者として参加した時も実感したのですが、今年も様々な国から多くの学生が集まり、一人一人がこれからの世の中を良くするためには何が必要なのかを意識して会議に参加していたため、私自身も後れを取らぬようにさらに努力する必要があると実感しました。2点目としては学生同士のシナジー効果です。私がテーブルチーフを担当した当初は、参加者にテーマに関しての問題意識を植え付け、私が参加者を上手く動かすことを想像していましたが、本会議が始まり参加者の勢いを目の当たりにし、考えていたやり方では不十分で、テーブルチーフとしての力が試されるのだと実感しました。テーブルチーフに必要なものは、乱暴な言い方をすれば、参加者のやりたいようにディスカッションをさせる力だと思いました。参加者はテーマに対して様々な意見を持ち合わせているので、それぞれの意見が活きるように話を上手く導き、彼らが納得できる状態を作り出すことが必要だったのです。本会議の中で、私自身の本来の役割に気付かせてくれた参加者には、感謝の気持ちでいっぱいです。



*プレゼンテーション資料・参考資料

・プレゼンテーション資料

https://prezi.com/mamjfxjwnuj-/food-distribution/?utm_campaign=share&utm_medium=copy

参考資料

・CODEX Alimentarius: Home

<http://www.codexalimentarius.org/>

・Produce GAP Standards: Harmonizing Food Safety

<http://www.foodsafetymagazine.com/magazine-archive1/augustseptember-2010/produce-gap-standards-harmonizing-food-safety/>

テーブルⅢ

LGBT フレンドリーな社会に向けて ～今私たちにできる取り組みとは～

テーブルチーフ：根本つばさ

①議題の背景

皆さんも LGBT という言葉を 1 度は耳にした事があるでしょう。LGBT とは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーを表した言葉であり、現在はこれらの性的マイノリティーのみでなく全ての性的マイノリティーを表す言葉として使用されています。現在、世界ではこの LGBT に対する動きが加速しており、アメリカの全州で同性婚が可決された事や日本でも渋谷区や世田谷区が結婚している異性カップルと同等の権利を与えるパートナーシップ法を発表したのは記憶に新しい事と思います。このような動きがある中で、世界では未だ LGBT に対する権利を認めないどころか、LGBT に対する差別、偏見、拷問などは後を絶ちません。しかし、LGBT の当事者たちは私たちと同じ人間であり、平等に扱われるべきなのです。では、何故このような LGBT に対する理解度の差が国によって生まれてしまうのでしょうか？私はこの理解度の差が出る理由を人々の LGBT に対する意識の差であると考えました。そのような考えから、私はこのテーブルのテーマを「LGBT フレンドリーな社会に向けて～今私たちにできる取り組みとは～」に設定し、人々の意識を LGBT に向け、LGBT フレンドリーな社会を作るために、私たちは今どのような取り組みが出来るのか考える事に致しました。

②議論の具体的展開

このテーブルでは、まずなぜ今学生が LGBT について考える必要があるのか、LGBT フレンドリーな社会とは何なのかを考えました。なぜなら、異なる文化、宗教、考え方を持つ学生がこのテーブルの目的である LGBT フレンドリーな社会に向けた活動を作るために、LGBT フレンドリーな社会の意義の統一が必要不可欠であると考えたからです。そしてインドネシア、ベトナム、フィリピン、モロッコ、日本から参加した各学生の国の LGBT に関する状況をシェアしていく中で、私たちは様々な問題を見つけ、学生に出来る取り組みはとても限られている事に気づきました。そこで、LGBT フレンドリーな社会に向けた取り組みを作るという当初の目標から、LGBT フレンドリーな社会に向けたアプローチを提示する方向に変更しました。各国の状況をシェアしていく中で共通していた問題としてあげられた LGBT 当事者と LGBT 非当事者による”lack of communication”を現状の問題として定め、その問題があげられる原因として当事者側にはいじめやサポート不足などの”insecurity toward social conduct”が、非当事者側には”lack of information”があげられました。それらの原因から LGBT フレンドリーな社会に向けて「教育」という観点からア

アプローチをかける事に焦点を当て、議論を行いました。

③事前活動報告

国内参加者の事前活動は参加者招集会 1 回、事前勉強会 2 回の計 3 回ほどありました。これらの活動の目的としては、2 点が挙げられます。まず 1 つ目は LGBT に関して興味はあるものの、実際知識が少なかった為に参加者たち自身で基礎的な部分から LGBT に関するインプットを行う事、そして英語力の部分で不安を抱えている参加者が多かった為に 2 つ目は英語での会話やディスカッションに慣れる事でした。これらの活動の他にも、東京レズビアン&ゲイ映画祭や全国学生 LGBT ミーティングなど LGBT に関する活動を行っているイベントに有志で出向きました。またこれら国内参加者の活動は、海外参加者と Skype で共有致しました。

<参加者招集会>

参加者招集会では、基礎的な LGBT の知識をインプットする目的で LGBT に関する如何なる事でも良いので気になる事を調査し、発表してもらいました。そこでは LGBT には、心の性、身体の性、好きになる性と 3 段階に分かれている事や教師が LGBT に関して知識がない事、同性婚は出来ても子どもには両方の性の親が必要なのではないかと考えている当事者の親を持つ子どもの話など様々な LGBT に関する新しい知識をインプットする事ができました。また英語ディスカッションの部分では、英語でうまく伝える事が出来ない、ディスカッションが同じ意見の堂々巡りになってしまうなどの反省が挙げられ、反省ミーティングをして次からの課題が見られました。

<第 1・2 回事前勉強会>

第 1 回事前勉強会では、参加者に事前に日本の LGBT についてもっと勉強したいとの声もあがった事から、教育、就職、結婚、取り組みなどの分野に振り分けて調べて発表してもらう事にしました。この勉強は、自分たちのインプットにもなった他、本会議中のプレゼンテーションにも繋がり大変有意義な時間となりました。また英語ディスカッションでは、前回の反省からまず初めにポストイットなどを使用し各自でブレインストーミングしてもらい、紙に貼って意見を共有し、最後にまとめるようにしました。この方法で行うと、各自話したい事がまとめられて意見を言いやすくなるという事が分かり、本会議中のディスカッションにも積極的に取り入れるようにしました。しかし、やはり問題点として意見が一方的な目線からしか述べられないという事があげられたため、別の立場の目線も入れて話すようにするように心がける事で話がまとまりました。

第 2 回目の勉強会では、テーブルチーフの大学の友人であり、オープンリーゲイとして活動している菊本寛さんにインタビューを行いました。

④分科会内容

◆分科会 1 【導入】

1 日目であるこの分科会はテーブルのスタンスについて話しました。具体的には、「私たちが出来る事」というタイトルにもなっているように、アライ（LGBT のサポーター）である私たち学生が出来る取り組みを考えるという事、そしてどの国にも共通する取り組みを考えるか個々の国で別の取り組みを考えるかはこれから考えるという事、そしてこの取り組みを考える為に必要な事をするスケジュールについて話しました。またディスカッションにおいて大切にしたい姿勢などを話しました。

また導入ディスカッションとしては、「何故私たち学生が LGBT についてディスカッションするのか」というテーマについてディスカッションしました。全体としてはやはり、異なるバックグラウンドを持つ学生が集まる事で国際的な立場から意見を交換できるや、現在 LGBT への動きが活発となる中今後の社会を担う私たち学生が話す事で社会に貢献出来るなどの内容の話が多く見受けられました。今回の Table3 の参加者は LGBT フレンドリーとは言い難い国の参加者が多く、その中で LGBT についてディスカッションする事に大きな意義を感じました。

◆分科会 2 【LGBT フレンドリーな社会の定義】

分科会 2 では、LGBT フレンドリーな社会を目指す取り組みを考える上で一番大切になってくるであろう、LGBT フレンドリーな社会の定義を考えました。方法としては、「LGBT フレンドリーな社会」と聞いて考えるものを個々にブレインストーミングしてもらい、2 グループに分けてディスカッションしてもらいました。その後、グループ毎に自分たちが考える LGBT フレンドリーな定義をした後で全体でシェアしてもらい、定義とキーワードを決めました。

◆分科会 3・4 【参加者の国のプレゼンテーション】

LGBT フレンドリーな社会の定義をした後で、理想的な社会と自国とのギャップを知る為（何が足りてないのか）に今度は個々の国の LGBT 事情について発表してもらいました。これは 1 つの分科会内に収める予定でしたが、どの国も発表内容が多く盛り沢山であった為に発表時間がのびてしまい、2 つの分科会を使う事になりました。1 つ 1 つの国の状況をホワイトボードに書き出し、そこで共通するものは lack of information である事が分かりました。そしてまた、その原因となるものを全体でディスカッションしてもらい、Education, Media, Religion が原因なのではないかという結論に至りました。

◆分科会 5 【情報不足の原因を探る】

分科会 5 では、何故 lack of information が重要なのか考えました。この回は、3 グループほどに分かれてディスカッションしてもらった後、オープンにするという形を取りました。前日の反省から、私がいちいち入らない方が良いのではないかといい事になり、参加者同士で自由にディスカッションしてもらった形式を取りました。結果はというと、ディスカ

セッションらしいディスカッションにはなり、話を発展させて“People’s actions for LGBT people”と“Influence of the info”という2つの diagram が完成できたほか、参加者たちも有意義な時間を過ごせた様でした。



◆分科会6【国内参加者による LGBT 先進国のプレゼンテーション】

この分科会では、自国と比較する為に LGBT フレンドリーな社会のプレゼンを国内参加者の3名に行ってもらいました。ここでは、前回出た“lack of information”の観点から見てもらうように指示し、先進国ではどのような活動を行っているのか考えました。そして、この“lack of information”をどうしたら action につなげられるのかディスカッションをしてもらいました。しかし、ここで出た案は今までにも各国が行ってきた案であり、行き詰まりを感じました。

ここで、国内参加者全体に夜集まる事を持ちかけ、night discussion をしました。国内参加者のみで集まってもらった理由としては2点あり、1つ目は私と参加者がスタディーツアーのメンバーやルームメイトなどの他の参加者たちからの意見として、取り組みを考えるのは悪影響を及ぼす可能性もあるし学生として出来る事に限りがあるという事、それならば取り組みを考えるよりも LGBT がいるという状況に慣れるような環境づくりの方向性を示す事の方が学生としてやりやすいのではないかと言われた事、成果発表会で伝える事が1つの学生としての取り組みになるのではないかとという事などを聞いた事を伝え、LGBT フレンドリーな社会のための活動を考えるよりも方向性を示した方が良いのではないかとこの事を共有したかったという事、そして2点目はその点についてまず国内参加者のコンセンサスを取りたかったからです。結果、当初のゴールから変更し方向性を示す方向で話を進める事にしました。ここでは、まずこの日に決めたゴールの変更を平等性を保

つ為に、①国内参加者としてではなくテーブルチーフとして考えたと伝える事、②アライだけでなく当事者達の意見も取り入れる事（LGBT 当事者である菊本寛君の意見も反映させて、私たちだけが変わるのではなくお互いの歩み寄りによって状況は変わる為）→"lack of information"を生み出してるのは非当事者と当事者の"lack of communication"だという事、③現時点で何が足りないのか考えた上で、"lack of information"を生み出している原因を探り、何処か1つの国を example としてあげて考える事、④非当事者と当事者の両方の目線から考えて方向性を探す事など、次の日に話す事を決めました。

◆分科会7【ゴールの変更、教育に焦点を当てる】

前日の夜に国内参加者と話した話を海外参加者にも共有しました。話はスムーズに進み、取り組みを考えるのではなく LGBT がいる環境に慣れる為の方向性を示す、そして世間の人の多くは中立的な立場にいるという事からという方向で進めていく事で海外参加者達とのコンセンサスが取れ、その為に図のような全体の流れの図を完成させる事が出来ました。また、切り口としては非当事者の目線から教育に焦点を当てて考えるのが効果的という結論に至りました。



◆分科会8【方向性を示すダイアグラムの作成】

分科会8では、事前勉強会でインタビューを行った当事者である菊本寛さんの話を元に当事者と非当事者の歩み寄りが必要だと考え、当事者自身が抱える問題点を探りました。ここではまた2グループに分かれてディスカッションしてもらった後、全体で共有してもらったのですが、全体での意見を総括して"Insecurity towards social conducts"という点

が問題であると考えました。そして当事者側でも教育に焦点を当てて考える事が決まり、当事者、非当事者ともに教育という切り口から問題に迫る事にしました。そしてここで問題点に対する解決策も出したのですが、抽象的なものであった為、参加者の国々から1つ国を例として取り上げて具体的なプロセスを考えてみる事になり、ソフトパワーの影響・渋谷区や世田谷区など現在 LGBT に向けた取り組みを始めている事などから日本を例に挙げて考えてみる事に決まりました。

◆分科会 9【解決策の具体案を考える】

分科会 8 と分科会 9 の間では、フィールドワークとして新宿二丁目に足を運びました。そこで新宿二丁目の雰囲気味わってもらうとともに、新宿二丁目が繁華街から離れている事、ゲイバーに比べてレズビアンバーが少ない事などに参加者たちは驚いている様でした。また、アメリカ人男性とアメリカで結婚されて湘南で結婚式を挙げられる予定の当事者の話も少し聞く事が出来ました。またサポートコミッティである山永さん、中野さんに少し残ってもらい、私たちの活動内容の共有、話を聞かせていただく事も出来ました。

分科会 9 では、海外参加者のモロッコの学生が連絡を取ってくれたモロッコで唯一カミングアウトされた小説家さんと Skype をしました。事前にメールで質問内容を考えていたので、そこから質問をして答えていただくという形を取りました。非当事者と当事者のコミュニケーションが大事であるという事、そしてやはり情報を集めるのが困難であるという事は彼からのお話にも出て来ており、自分たちの活動に当事者の声が入る事で強化された他、モロッコ唯一のカミングアウトした当事者のお話を聞くという貴重な機会を頂き、有意義な時間を過ごす事が出来ました。その後は教育の観点から日本に焦点を当てて考えるという事で解決策を探り始めました。

◆分科会 10～12【プレゼンテーション作成】

前回から引き続き、日本に焦点を当てて教育という観点から考え、ディスカッションをしました。そして、学校職員を教育する、授業のコンテンツを変える、という3つの事が解決策として挙がりました。プレゼンテーションではその中から学校職員を教育するという点について話す事に決め、プレゼンテーション作成に移りました。

⑤個人所感

現時点で考えている事が2点あります。まず1点目は、自分のテーブルチーフとしての技量の不足さに気付かされたという点です。私は今まで LGBT に関する勉強は他の大学生に比べたら多くしてきたと自負しており、知識量ではかなりある方だと考えておりました。しかし、テーブルチーフとしての力としてはまだまだ乏しく、議論が回せずに山永さんや中野さんなどのサポートコミッティに支えられ、また自分自身のメンタル面の弱さから実行委員や参加者たちにもたくさん助けられました。この点ではかなり反省しており、テーブルチーフとしての立場をわきまえず、自分自身の本来の性格であるネガティブさとメンタルの弱さ、そして論理より感情が優先してしまうところが出てしまったと反省しております。現在、冷静に考えてみれば多くの反省が見当たるにもかかわらず、当時は自分の事

に精一杯で周りが見られていなかったなと感じております。その点で、私はテーブルチーフという仕事に対して自分が想像していたより、もっと真摯に向き合い、リーダーシップをとるという事はどのような事なのか勉強をもっと沢山重ねるべきだったと反省するばかりです。

そして2点目は、国際学生会議というものの意義についてです。それは2つあると感じました。まず1つ目は、当たり前ですが地域や国境を超えて「学生」がディスカッションをするという事です。正直、私はディスカッションやプレゼンテーションは苦手中の苦手であり、今まで国際学生会議の存在は知りながらも逃げていました。しかし、ありきたりな言葉になってしまいましたが、国内外問わず異なるバックグラウンドを持つ学生たちが同じ問題に向き合い、意見を交わし合うという事は、今後社会に出て行く立場としてとても重要な事と感じました。そして2つ目の理由としては、人との出会いです。私はこれまで多くの人と出会う事に重点を当ててきましたが、やはり国際学生会議は多くの人と出会い交流する場として最適な場所でした。国際学生会議でなければ、地方や海外の学生はもちろん、都内の人だとしてもなかなか他大学や理系の人と出会う機会は無かったでしょうし、新しい場所に踏み出す事も無かったと感じています。例えば、私の場合、国際学生会議以外にも勉強の為にLGBT関係の学生ミーティングなどに参加し全国の多くの大学生と関わりを持ちました。このように、大学生という立場で多くの人と出会い、関わり、新しい道を切り開く事はここでしかない機会だと感じています。

以上、大きく分けて2点が私が感じた事です。長くなりましたが、本当に多くの深い反省と達成感の入り混じる独特の感覚で終えた国際学生会議でした。今回私が参加させてもらえた事、多くの人に出会わせていただいた事、そして実行委員として働かせていただいた事、本当に感謝しております。まだまだ達成感、悔しさなど色々な感情が駆け巡っておりますが、やはり1番に来るのは学生生活のこの年に参加出来て本当に良かったという事です。改めまして力不足の私の支えになってくださったサポートコミッティをはじめとする実行委員の皆さん、国際学生会議に関わった全ての皆様に感謝致します。本当にありがとうございました。



*プレゼンテーション資料

<https://prezi.com/avbfi-xlq48n/untitled-prezi/>

テーブルIV

越境する市民間関係

テーブルチーフ：宮内 栄

①議題の背景

現在の私たちは数十年前に比べ遥かに人・モノ・情報が国境を超えて自由に移動しうる、より“密な”世界に生きています。それはとりわけ 90 年代の爆発的なインターネット普及や冷戦崩壊、それに伴い生まれた国際協調の流れなどに後押しされたものともいえるでしょう。これを人はグローバリゼーションと呼び、それはポジティブな文脈で語られることが多いのが現実です。しかしボーダーレス化それ自体が新たな地球規模の問題を生んでいるという負の側面も、グローバリゼーションは持っています。そして問題なのはこのような問題に対処しうるのは従来国際関係において主要なアクターとされてきた「国家」では必ずしもない、ということです。主権国家が依然保持する影響力は無視し得ませんが、ここでとりわけ注目すべきは市民レベルにまで確かに問題へ対処する機会が落ちてきているということです。

このように機会が落ちてきている一方で昨今、日本社会では人々の政治・社会的問題への無関心（アパシー）が顕著にみられます。日本社会に生きる一若者として、私はその現実を憂慮しています。元来自らが生きる社会について考えることは自己理解にも通じる、自分自身の生に資する行いのはずです。

このような日頃の思いこそ、「越境する市民間関係」というテーマ設定の根底に間違いなくあったものの一つです。加えて言うなれば、ISC という場所で議論することの意味についても考えました。世界中の学生たちが一堂に会して議論を行う場。それは国際社会の縮図ともいえるでしょう。そして学生である私たちに今できることは、まず真摯に現実を踏まえた説得力のある議論を行い、問題を“イシュー化”することです。問題はただ問題であるという事実それ自体ではイシューとして取り上げられる訳ではありません。イシューになるよう、様々な利害関係者に訴えていく努力が欠かせないのです。そしてその一歩となる議論こそ、今私たちにできることだろう。そう思い、このテーマを ISC に相応しいものと確信し、設定しました。

②議論の具体的展開

グローバリゼーションが抱える諸要素は多岐に渡りますが、40 時間弱の限られた議論時間であること、また最終プレゼ



ンテーションに向け、ある程度明確な結論というものを導き出したいと考えたため、今回は4つの大きな軸（経済、開発、政治、文化）を設定し、ディスカッションを展開しました。各軸で行ったことの論理的枠組みはほぼ同じで、以下の通りです。まず、各軸についてグローバル化の展開に付随する 이슈をあげてもらいます。その後それが関連するアクターに与える正・負両面の影響を考えていきます。問題の輪郭がはっきりした後、その原因を考え、最終的に解決策として第一に問題をなくす方向の解決策を、あるいはそれが難しい（ボーダーレス化それ自体の否定に結論を求めても無意味なので）場合には第二に問題の負の影響を極力抑える方向での策を考えていく、ということを行いました。

③事前活動内容

国内参加者に関しては本会議前に事前活動の機会がありました。ただし海外参加者がいない場で議論の内容それ自体に踏み込んでしまうことは避けたかった為、位置付けは“英語でアカデミックな内容の自分の意見を相手に伝えるよう論理的に話す”ことへの慣れの機会とすることでした。

<参加者招集会>

7月4、5日の2日間に渡り行われた招集会合宿が、国内参加者初の顔合わせとなりました。初日の夜にあった初の分科会ではアイスブレイクを兼ね、その場で1分準備時間をとった上で一人3分程度ひたすら英語で自己紹介をしてもらう、ということをしました。各人の自己紹介の後にはQ&Aの時間も入れ、終始和やかな雰囲気が進み、互いを知るよいきっかけとなったようでした。二日目の分科会ではまずアカデミックなリサーチをする際の方法論（有用な文献・論文・サイト、インターネット上での検索方法等）についてのシェアを主に下級生に向けて行い、その後経済、開発、政治、文化、4つの軸について思いつく言葉をひたすら書き出してもらいマインドマップを作る、ということをしました。目的は大学での専門がバラバラであるメンバー間で、ある程度は前提的知識を本会議前に慣らしておこうというものです。結果として出てきたキーワードには専門用語も混じっており、各人にとってよいリサーチの足がかりとなったようでした。

<第1・2回事前勉強会>

7月19日に第一回、8月2日に第二回の勉強会を行いました。勉強会ではメンバーが日頃疑問に思っているような諸問題の中からテーマの4分野いずれかに関連したトピックを持ち寄り、それについて英語ディスカッションを行いました。ディスカッションのコアとなったものには以下のようなものがありました：

- ・ 文化を存続させる価値、文化それ自体の価値とは何か
- ・ 発展途上国への現在の開発援助は、そもそも必要なのか。開発援助が失わせている従

来の価値観の重要性について

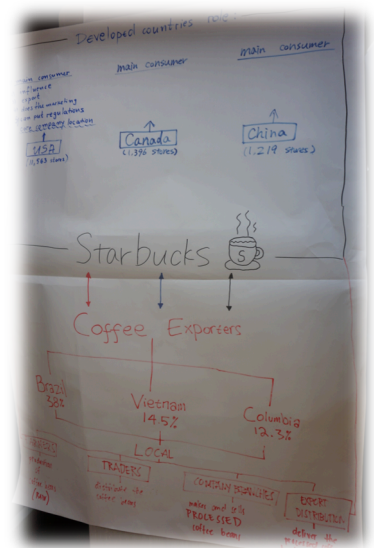
- ・ 国際政治の権力構図はどのようなものになりつつあるか
- ・ “流行”は何故存在するか、流行が伝統に変化するときはどんなときか
- ・ 集团的自衛権をめぐる一連の流れについてのあなたの立場は
- ・ 日本の初等教育における英語教育の是非について
- ・ 今、グローバリゼーションについて考える意味とは

各テーマについての議論の中で出た種々の話は本当に一つ一つが意義深いものだったことをここで断っておきますが、スペースの都合上内容それ自体についてここでは割愛させていただきます（総計約12時間の議論でした）。この勉強会を通じ本会議に向けてという意味でメンバーに得てもらえたものとしては第一に英語で意見を表明することがいかに難しいかという実感、そして第二にディスカッションが何たるかということでした。一点目については英語がそもそも出てこないという意味での壁もしかりですが、“伝えているつもりが伝わっていない”というコミュニケーションのズレについても、本会議前のこの段階で実感してもらえたことは大きかったと思います。二点目については、“学生会議”というISCの意味を考えてもらうことと同義であったと思います。つまり、端的に言えば本で読んだ知識を吐き出すこと以上に、自身の主張の根底にある主義信条が何たるかを自覚した上で、それを伝えようとする段階に至ってこそ、議論の醍醐味がある、ということです。学生である私たちは知識・専門性以上に、その点に注目した議論を模索していくべきでしょう。

④本会議内容

◆分科会1【導入】

前日の夜に一時間程度の自己紹介時間を設けていたため、二日目朝の分科会1からテーブル4は本格的な議論に入りました。まずは12回の分科会の会議計画の説明、及び会議に入る上で必須となる前提的スタンスの共有を行いました。特に注力したのは私、テーブルチーフの立ち位置についての認識共有です。同じ学生であるテーブルチーフの立ち位置とはいわゆる教授と学生のような関係ではありえません。全員が対等に意見を発信し合う会議の場を作りたい、その上でテーブルチーフはメンバーよりもマクロな目線で議論の全体像を捉え、何らかの統一見解形成にむけて議論を収束させていく舵取りの部分に特に存在意義があるのだと、その点を共有するよう努めました。結果的にその後、三日目・分科会3からそのような当初目指していたテーブルの議論の形が形成されていったため、この分科会1における認識共有に一定の効果はあったと考えています。



また導入ディスカッションとして「このテーブルでの議論で答えを見出したいと思っているあなたの問いは何か」という、いわばこのテーマを選んだ根本的な動機のシェアのようなことをしました。全体として海外参加者の興味は市場のグローバル化により発生している移民労働者やそれに伴う国内産業空洞化等経済面へ多く見られ、一方で国内参加者の興味は排外的ナショナリズムの勃興という日本社会の現実に感化された、人の所属集団意識の問題や集団間の衝突の問題についての言及が多かった印象でした。

◆分科会 2 【経済】

まずは市場のグローバル化の実態を描出し、消費者としての自己と、違う国に生きる生産者との“つながり”について実感してもらうことを目的に、ダイアグラムを作成してもらいました。2グループに分かれ模造紙に作成してもらった後、互いにプレゼンテーション形式でシェアをしました。結論としては関係それ自体についての理解は深まり、また各々のプレゼンテーションから特にマナーの部分について学ぶものはあったようですが、全体として“もっと自由に意見を表明し合いたい”という空気がありました。そのためこの日の夜私はどうすればもっと“自由に”、そして同時に“体系的に”議論を進めることができるだろう、と二者の間のバランスの取り方について試行錯誤の考察をしていました。今になって考えてみると、この分科会でのいわば“失敗”があったからこそ、その後の活力ある議論展開につながったのだと実感しています。事前の自分の会議計画と実際との齟齬の調整に苦労した日でした。

◆分科会 3 【文化】

前日の反省を踏まえ、この日は初めに一言「今日からはもっと自由に、話し合うスタイルでいきましょう」と言った上で「あなたの中の文化の定義とは何か」という大きな質問をフロアに投げかけ、まずは近くの2、3人で話し合ってもらいその後全体のフロアにグループで出た話をシェアしてもらう、というやり方で始めました。初めのうちこそ参加者は昨日までのやり方とはがらりと変わった進め方に戸惑いを隠せない様子でしたが、小さなグループ



での話し合いが始まると段々と、生き生きとメモを片手に自分の意見を言い合い、活発な議論が始まったのです。

そうして次にフロアに投げかけた「グローバリゼーションが与える文化的側面への影響とは何か」という問いに対して出てきた 이슈を、私の方でホワイトボードに書き出していきながら同時に、それがポジティブなものであるかネガティブなものであるか、ということ进行うていきました。その後、ネガティブなことについては原因が何かを考えました。原因が何かかわれば、それをなくすことを解決策として提示すればよいと考えたからです。

◆分科会 4～6 【政治】

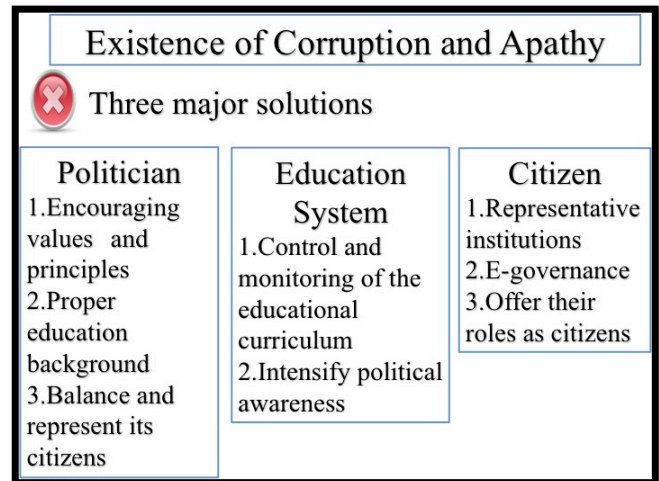
恐らく、最も議論が深堀りできたのが政治の軸であったと思います。今回私たちはグローバリゼーションに伴う“自由民主主義”という価値の広がり、特に取り上げました。自由民主主義を掲揚している国家は数多くありますが、その中でも自由主義の価値を守りながら公正な選挙を通じた民主主義の実現がなされている国と、そうではない国に分けられます。その違いはど

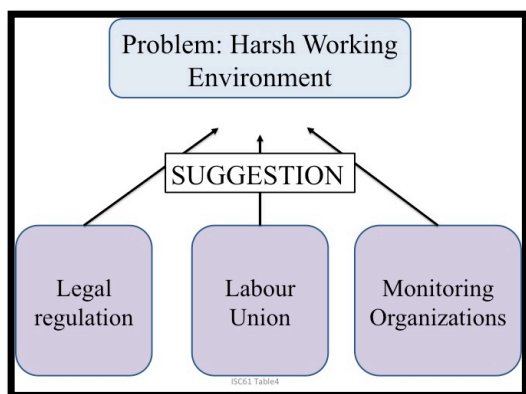
こから生まれるのか。私たちは“自由民主主義”というコンセプト自体が確定的なものではなく、個々のアクターによる解釈の余地を残している、そのことに一因が求められるのではないか、と考えました。そしてその解釈の余地が、時に自らの強権的独裁体制正当化の道具としてある国々に“自由民主主義”という言葉を用いらせているのだと。ならばその解釈プロセス自体を改善するにはどうすればいいかという話になります。そしてこれは必然的に各国国内の政治レベルまで落ちる話です。そこで今回出てきたのが、“汚職とアパシー”でした。

◆分科会 6～7 【経済】

文化、政治の軸を経て会議の進め方についての方法論が固まってきたこの段階で、再び経済の軸に立ち戻ることになりました。分科会1の段階では何もはっきりとした議論も結論も、出ていなかったからです。そしてこの経済の軸はとりわけグローバリゼーションに伴う問題の巨大さにはっきりとぶつかった回であったと思います。

まずは注目するアクターを”労働者”に限定しました。その後労働者にまつわる、グローバリゼーションにより引き起こされるネガティブな 이슈が何か議論したところ、①仕事の機会喪失②劣悪な労働環境の2点が上がりました。①については、分科会1で海外参加



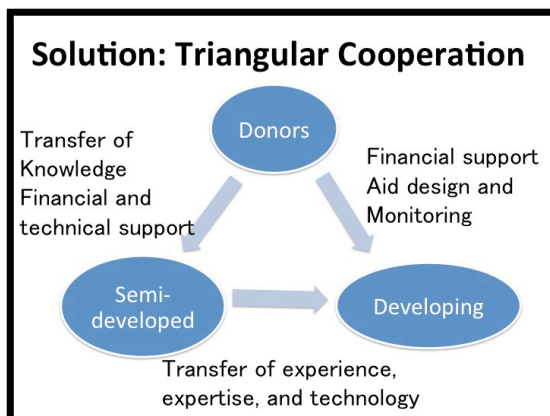
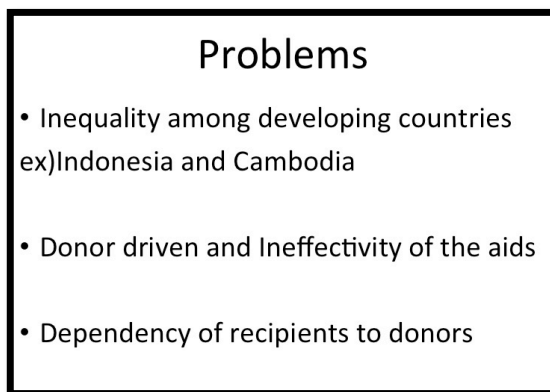


者の多くの関心対象であったもので、“国内市場”という括りが今や薄れ、世界市場におけるマーケットメカニズムに人々の労働は多大に影響されるようになっている。そして先進国の知識・技術のある人間がいわゆるホワイトカラージョブに、そしてそれのない途上国の人間がブルーカラージョブに従事するようになっているという問題のことです。つまりこれは途上国からの移民労働者が先進

国でブルーカラージョブに従事していること、逆に先進国から途上国へ派遣される人間が途上国の上級職の多くを占めている現実の指摘です。直接経済の話とは関わりませんが、これに伴い発生しているゼノフォビア (xenophobia) の問題についても議論の中で指摘が上がりました。しかし、多くの問題それ自体への指摘が上がったという点では盛り上がったディスカッションでしたが、原因、そして解決策を考えるという段階に至った時、重い空気が流れました。つまり市場のグローバル化それ自体が原因であるなら、問題解決という意味での解決策はグローバル化を止めてしまうことになってしまう、と。そしてそれは第二次世界大戦前のブロック経済の顛末という歴史が、賢明な解決策でないと示しています。結論として、今回はこれ以上この問題について考えても結論はでない、ということでより解決策の提示が可能な②の問題に結論を求めることにしました。

◆分科会 7～9 【開発】

開発についてはまず、その他3つの軸との異色の話から入りました。経済、政治、文化と違い、開発は“それ自体がグローバル化により変化する”という性質のものではないからです。グローバリゼーションは開発援助のニーズ即ち富める国と貧しい国の格差を拡大させている、というウォーラステインの世界システム論の立場からの簡潔な説明を、特に国際関係を専門とするメンバーたちがその他メンバーにするという形で前提の整理を行いました。この頃には各々が自らの専門分野の知見に基づいた意見を披露し合うという双方向的なやりとりが活発に行われる議論の空気が出来ていたので、終始非常に活発な意見交換が見られ良い雰囲気であったと思います。そし



て出てきた 이슈は援助(Aid)に関連したものでした。

◆分科会 10～12【プレゼンテーション作成】

4つの軸からグローバリゼーションの孕む問題について考察し、問題に対処していく策をここまで模索してきました。限られた時間の中で可能な限りこの問題についてシステマティックな方法で考察を行うことはでき、それゆえサマリー発表に際しての苦労はさほどありませんでした。しかしながら本来グローバリゼーションとは文字どおり“進行中のプロセス”のことであり、ゆえに付随する問題も常に変動的でありかつ新たな問題も次々生まれています。私たちはこの問題について、常に考察し続ける必要があるのです。メンバーのみならず、サマリーを聞きに来てくださった方々にとっても、今回の私たちの議論が現実の問題と日々真摯に向き合う一つのきっかけの一助となったであろうことを信じています。



⑤個人所感

私の ISC61 との出会いはかなり特殊なものでした。多くは昨年度の参加者、或いは知人の紹介という中、私は完全に外部からでした。英語競技ディベートをやっていたこともあり元来議論好きだった私にとって、“テーブルチーフ募集中”という文字を見たとき応募しないという選択肢はありませんでした。実際本会議を終えた今自分の決断は正しかったと確信しています。そして思うのは純粋に議論がただただ楽しかったということ。時間という制限がなければ、どんな議論に発展しえただろう、そう思う度に今でもわくわくするのです。そして、ISCは私に多くの人たちとの出会いをもたらしてくれました。何よりかけがえのないものはそれかもしれません。末筆ながら、ISCを通じ出会い、関わって下さった全ての皆様に、心より感謝致します。



*プレゼンテーション資料

<https://drive.google.com/file/d/0B7rFYMOeLZB1dW93SUdaRGhXRVk/>

テーブルV

教育とグローバル化 ～グローバルシティズンシップ教育の可能性と限界～

テーブルチーフ：山田智希

①議題の背景

「教育のあるべき姿とは、一体どんなものなのだろうか。」

これは、時代や場所を問わず、あらゆる社会・共同体で重要な問題として議論されてきたものです。言うまでもなく、その答えは、時代によって全く違います。変わりゆく社会の中で、いま教育に何が求められているのかを常に考え続けることが、社会の維持・発展のために不可欠であることは明白です。

翻って現代の社会を見るに、国境を超えた人々のつながりがこれまでにないスピードで強まると同時に、環境問題や移民の問題といった一国では解決できない地球規模の問題が続々と生じ、現に人々の生活、そして生命を脅かしているという現状が眼前に存在します。言うまでもなく、こうした社会で求められる人材というの、かつてとは当然違ってきます。ここで、一つの問いが生まれます。

こうしたいわゆる「グローバル化」した世界において真に求められる教育とは、一体どのようなものなのか。

国連の機関の一つであるユネスコは、この問いに対する一つの答えとして、特に 2000 年代に Education for Sustainable Development (ESD：持続可能な開発のための教育) という考え方を示し、これを推進していました。これは環境教育やエネルギー教育、さらに平和教育といった様々な教育を包括する考え方であり、これに則った実践例も数多く紹介されています。

しかし、2012 年、国連の事務総長である潘基文氏が、Global Education First Initiative と呼ばれるものを発表しました。これは、国連が全体として教育を最優先事項に置くという事を明確にしたものですが、注目されるのが、この中で掲げられている三つの柱の一つに「地球市民の育成」が据えられている、ということです。ユネスコはこれを受けて、従来の ESD と並置する形で global citizenship education(GCED)という新たな考え方を中心的な概念として置き、以降その普及のための様々な努力をしています。

②議論の具体的展開

ユネスコは GCED について、多様性の尊重、連帯の意識といった「態度」、地球規模の問題に対する深い「知識」、批判的思考能力などの「認知的スキル」、コミュニケーションスキル等の「非認知的スキル」、そして地球全体の問題を解決するための「行動力」を育てるものだと説明しています。しかし、問題は、そのために具体的に何をすれば良いのか、ということです。ユネスコは現在、明確な方法論を自ら示しておらず、教育現場とすれば方法論を

自ら考えなければならないという状況です。これが、GCED がなかなか浸透しない理由の一つといえます。さらに浸透という観点で言えば、各国・地域が独自の教育制度を有する中で、またそもそも教育機会そのものが乏しい地域が多くある中で、GCED をどう広めていくのか、という問題もあります。

それだけではありません。GCED は地球市民としての自覚を教育の受け手に持ってもらうことを大きな目標としていますが、それによって人々の「国民」としてのアイデンティティが弱められてしまうのではないかと。あるいは、地球規模の連帯を重視する GCED は、個々の競争をすべて否定する方向に働いてしまうのではないかと。国益とグローバルな利益が衝突したとき、GCED は常に後者を優先することを要求するのか。こうした問題に、ユネスコはいまだ説得的な解答を与えきれてはいません。

ユネスコはいままさに、これらの問題と闘っている最中です。そこにこそ、学生が議論する意味がある、と私は考えました。つまり、これまで受けてきた教育を新鮮な記憶に基づき客観的に見つめ直し、かつ大学における教育の当事者でもある私達が、背景も価値観も違う他国の同輩と意見をぶつけ合いながら、大人とは違った視点でこれらの問題にアタックし私達なりの答えを出すことで、彼らが答えを出せずにいる状況を打破することに少しでも貢献できるのではないかと。そう、私は考えました。

そこで私達は、「そもそも GCED は本当に重要と言えるのか」という点から出発し、ユネスコの見解に理由なく同調するのではなく、むしろ批判的にこれを検討しなおすことを通じ、「本会議の約一週間で、GCED についてのユネスコへの一つの提案を作り上げる」という目標を設定し、議論に取り組むことにしました。

③事前活動内容

<参加者招集会>

7月4、5日に招集会合宿がオリンピックセンターで行われ、その二日目をほぼ一日ディスカッションに充てることができました。

一日目の最初の分科会では、各自自己紹介をしてもらい、テーブルの方針や本会議前の勉強会で行うこと（本会議での批判的検討の基礎として、①ユネスコの文献を読みこみ GCED について深く理解する、②日本の GCED の現状や可能性をまとめる、③本会議でのディスカッションプランを考える）を伝えました。終始笑いの絶えない和やかな雰囲気で行われました。

二日目は、ユネスコの出している GCED についての代表的な文献（事前に参加者で共有）を読んできたうえで、「GCED とは何か」「ユネスコは今日の世界におけるどのような問題を解決したいと考えているのか」「グローバルシティズンとはどんな人材なのか」といった間について、文献を基に予め考えてきてもらい、それを発表してもらいました。その中で、GCED が目指す a just world とは具体的に何なのか、短期的には地球上の全員に GCED を提供できないという現状において、一部の人のみに GCED を行うことに意味があるのか、など様々な論点が浮かび上がりました。今回の目的は、GCED について理解するとともに、本会議で議論すべき論点を見出すことであつたため、これらの論点についてテーブルとして

の回答を出すことはしませんでした。午後は、Oxfam という海外の NGO が示している「数学における GCED の実践例」の資料を読み、これをもし日本に導入するとしたらどのような問題が生じるか、について議論しました。貧困率や識字率など地球上の生のデータを数学の授業に活用するというこの興味深い案については、しかし、「生徒や親に地球市民の重要性が認識されていない状況では反発が起こる」「教員の負担が増える」「地球上のデータは身近な例とは言い難く生徒のやる気が減退する」等、多くの問題点が参加者により指摘されました。



日本における GCED 導入の難しさを感じるとともに、本会議で「GCED を普及させるには？」というトピックを論じる際にどのような論点を議論すればよいのか考える材料を得られました。

< 事前勉強会 >

8 月 8 日、本会議 2 週間前に東京大学本郷キャンパスで行った事前勉強会では、本会議において何をどの順序で議論するか、

を中心に議論を進めました。

これに先立ち、海外参加者には予め、招集会で国内参加者が扱った「数学における GCED の実践例」を読み自国への導入に伴いうる問題点を考えてもらい、メールで送ってもらいました。各々が熱心に取り組んでくれたおかげで、のべ 100 以上の問題点が送られてきて、私としては驚くとともに、本会議での議論が充実したものになるだろうという確信を得ました。

午前中は、それらの回答と、招集会における国内参加者による議論で出た問題点を照らし合わせ、共通点や差異を挙げつつ、あまたの問題点を限られた時間で論ずべく、それらをいかに整理・分類できるかを話し合いました。様々な分類方法が提案される中、「GCED それ自体のはらむ問題か、それぞれの国の持つ独特の状況が生む問題か」という二分法がクリアなようだということになり、これに従い多くの問題点を分担して分類しました。結果、一定の範囲で有効な分類はできたものの、どちらにもあてはまりそうなものも多数生じてしまい、効果的な分類の難しさを痛感しました。

午後は具体的なディスカッションプランを練ることに充てました。結果的に、

- (1)GCED に関わる様々な概念の定義を確定 (2 コマ)
- (2)GCED が世界の諸問題を本当に解決できるのか(2 コマ)
- (3)GCED をめぐる数々の問題点の検討 (5 コマ)
- (4)プレゼン作成・練習 (3 コマ)

という形が良いという結論に至り、その後 1 時間ほど、本会議の準備として簡単なテーマで英語のディスカッションの練習を行いました。

④本会議内容

◆分科会1【プレゼンテーションの練習(1)】

最初の分科会は、GCEDについての議論には入らず、まずプレゼンの練習を行いました。テーマは、「中学生に『〇〇をなぜ勉強しなければいけないの?』と聞かれたら」。そして、〇〇に入るものとして「芸術」「英語」「数学」の3つを用意し、私を除く10人を3チームに分けパワーポイントを用いてプレゼンしてもらい、互いに質疑応答を行い、得点を競うという形式にしました。これを行った意図は主に以下の3つです。

(1) 前日の自己紹介にとどまらず、協力してプレゼンを準備し発表するという作業を通じて、さらにメンバー間の結束を深めてもらう

(2) 成果発表会におけるプレゼンが私達の議論の一つのゴールであったので、ゴールに何があるかを認識し、議論→プレゼンという本会議全体の流れを体感してもらう

(3) テーブル5の「自分の考えをグループでシェア→テーブル全体でシェア→相互批判」というディスカッションスタイルを体感しイメージを持ってもらう

(4) 各メンバーのプレゼン能力を把握する

分科会1の2時間半は丸々その準備に充てました。

◆分科会2【プレゼンテーションの練習(2)・GCEDの「ゴール」とは(1)】

まず各チームにプレゼンをしてもらい、相互に質疑応答を行いました。その後、全員で「説明がわかりやすかったか・論理的だったか」「パワポは見やすかったか・効果的だったか」

「話者の姿勢・熱意はどうだったか」の3点をそれぞれ10点ずつで互いに採点してもらい、勝者を決めました。各チームとも、パワポの見やすさ、発表の姿勢、英語力とも申し分なく、投げかけられた質問もすべての的を射たレベルの高い質問で、正直驚きました。その後、互いの健闘をたたえつつ、私からプレゼン練習の意図(特に上記(2)(3))を伝えました。

次に、「GCEDを深く理解する」というステップ1の一環として、GCEDのゴール、すなわちユネスコがGCEDを通じて実現したい世界(a just, peaceful, tolerant, inclusive, secure and sustainable world)とはどういうものか、この6つの要素の定義を明らかにするという形で議論しました。ここでも3グループで要素を2つずつ担当して考え、その後各グループの意見をテーブル全体でシェアし、互いに批判し合う、という方式をとりました。早速活発な議論が交わされ、justについて「equalとは何が違うのか」、peacefulについて「conflictが全く存在しない状態でなければ、peaceといえないのか」などの多くの鋭い質問を基に、各グループが定義をブラッシュアップしました

◆分科会3【GCEDの「ゴール」とは(2)・GCEDとESDの関係】

ディスカッション2日目に入りました。まず、朝のウォーミングアップとして、参加者からぜひ議論のテーマにしたいと声の上がっていたTEDの動画(テーマは「学校は生徒の創造性をつぶしてしまうのか」)を視聴し、考えを述べてもらいました。自分の体験にひきつけて話してくれる参加者、学校のシステムに言及し創造性をつぶす理由を説明してくれる参



加者、「創造性をつぶすとはいえない」と動画に批判的な参加者など、各々が独自のスタンスで持論を展開し、大変刺激的でした。これぞ国際会議の醍醐味だと感じた瞬間でした。

その後、分科会2の議論の続きを済ませ、6要素すべてに定義を与えました。そしてさらに GCED の理解を深める意味で「GCED と ESD の関係」について簡潔に議論し、ユネスコの文献を基に

「GCED は包括的な考え方で、ESD はそれに包含される」という結論を得ました。

◆分科会4【既存の価値観との衝突(1)～「連帯」と「競争意識」①】

ここまでの議論を通じ GCED について深い理解を得られたところで、いよいよ GCED の問題点の検討に入りました。

GCED を巡っては問題が山積し、かつその整理・分類が難しいことは事前勉強会で明らかになった通りで、本会議では、事前勉強会で用いた二分法を改良し、「GCED の根幹に関わる理論的・抽象的な問題」と「現実的なレベルでの問題」に分け論じることになりました。

まず取り上げたのは前者で、特に、GCED という新しい考え方がはらむ「既存の価値観・考え方との衝突」をテーマとしました。ユネスコが特に問題意識を持っている部分です。

一つ目は、地球規模の連帯(global solidarity)と個々の競争意識(individual competitiveness)の問題。GCED は前者の重要性を説きますが、ではそれは果たして後者を否定することにつながってしまうのか。競争がない社会など存在しうるのか、そして望ましいのか。それらがここでの問題です。分科会4ではまず議論の前提として、この二つの言葉を定義することから始めました。前者を5人グループ、後者を4人グループが担当し、この日はそれぞれのグループの定義を共有して終えました。

◆分科会5【既存の価値観との衝突(1)～「連帯」と「競争意識」②】

ここからディスカッション3日目です。まず、分科会4で明らかになった各グループの global solidarity/individual competitiveness の定義について互いに批判し、修正していきしました。その結果、

前者：前述の6要素を持つ理想の社会を作るプロセスとしての、相互扶助の行動

後者：個々が必要・欲求に応じ目標を達する為の競争意識

という定義となりました。

これを基に、両者が果たして共存できるのかという点について議論しました。まず、個人的に「共存できる」と考えた人(8人)と、「できない」と考えた人(2人)に分かれ、なぜそう思うのかを互いに表明し、それを批判し合いました。議論では、いわゆる「ゼロサム」的(片方が得をすれば片方が損をする)状況と、「非ゼロサム」的(皆が得をすることができる)状況に分けて考え、後者では共存が比較的説明しやすい(たとえば科学技術など、「競争」が皆の幸せを増大させ、「連帯」につながりうる)一方、前者において共存がありうる

のかという点が焦点となりました。白熱した議論が展開されましたが、結局、ゼロサムの状況では、確かに競争が勝者・敗者を生み、そこから **conflict** が生じうるものの、**global solidarity** を「プロセス」ととらえる私達の定義からは、**GCED** を通じ相互理解・他者への敬意を持つことで、**conflict** を平和的に解決しようと様々な試みがなされ（それが **global solidarity** というプロセスそのものだということになります）、結果的に理想の社会が形成される、よって両者は両立しうるのだ、という結論に至りました。

◆分科会 6 【既存の価値観との衝突（2）～**global identity** と **local identity**】

「既存の価値観・考え方との衝突」の第 2 幕として、**global identity** と **local identity** の衝突に注目しました。**GCED** は「グローバルシティズンとしてのアイデンティティ」を学習者に持ってもらうことを一つの目標としています。しかし各国において、国民としてのアイデンティティを育てることも重要な課題であることは否めません。もし両者が相容れないものだとするならば、それは **GCED** の普及の大きな壁となります。私達はまず、アイデンティティの辞書的定義を参照した後、アイデンティティにはいくつかの層があることを認めたいので、議論の結果、以下のような整理を行いました。

personal identity→「個」のアイデンティティ

local identity→「共同体の一員」としてのアイデンティティ

global identity→「地球市民」としてのアイデンティティ

つまり、一国民、一地域のとしてのアイデンティティは **local** にすべて分類し、一方で **local** は、他の共同体の存在を想定する点で **global** とは区別される、という整理です。**local** という言葉が適切かは疑問ですが、さしあたりはユネスコの文献に使用されている言葉をそのまま用いて議論を進めました。

そのうえで、**global identity** を育てることが **local identity** を弱めてしまうのか、という点を議論しました。ここで焦点となったのが、**GCED** の性質です。すなわち、**GCED** は各人にその価値観の受容を強制するのか、それとも、理解はさせるが受容の強制はしないのか、というものです。もし前者ならば、**local identity** への影響は大きいと考えられます。しかし、私達は、ユネスコの諸文献の検討を通じ、**GCED** は後者であると結論付けました。そのうえで、もし後者であるならば、**local identity** を弱めることはない、という結論に至りました。

◆分科会 7・8 【**GCED** を広めるには（1）～「広める」とはどういうことか】

早くもディスカッション 4 日目、議論も折り返しです。前日の本会議研修旅行で心身ともにリフレッシュした私達は、いよいよ、最後かつ最も重要な段階、「**GCED** をどうやって広めればよいのか」に進みました。

まず、**GCED** が「広がった」状態とはいったいどういう状態なのか、そこから確認しました。ある地域のすべての教員が **GCED** について認識していれば、その地域に「広がっている」といえるのか、すべての学校が **GCED** の実践までしなければ「広がっている」とはいえないのか。議論の結果、私の予想に反して、「認識」をすべての人が持っていれば「広

がっている」といえる、という結論になりました。そのうえで、一口に「広がった」といっても、一人一人には、単なる「認識（GCED の存在や、基本的な考え方を知っている）」、一歩進んだ「理解（正確な目的や方法論がわかっている）」、最も進んだ「実践（行動に移している）」という 3 レベルが存在し、各人のレベルを高めていくことを考えるべきだ、という考えが生まれました。かつ、「政府」の「認識・理解・実践」と「人々」の「認識・理解・実践」を分けて考えるべきだ、という意見でまとまりました。

これを踏まえて、より現実的な提案を出すべく、参加者の国（スリランカ、インドネシア、ベトナム、日本）に焦点を絞り、これらの国の「広がり」のレベルを高めるにはどうしたらよいかをこの後議論していく方針を確認しました。

◆分科会 9・10【GCED を広めるには（2）～現状分析と具体的な解決策①】

まず参加者が国ごとに分かれ（スリランカは一人だったので私が加わりました）、各国の現状（政府・人々がどのレベルなのか）と、そのレベルが高まらない要因（問題点）を話し合ってもらい、シェアしました。その結果、人々に関してはすべての国で「認識」が不十分、政府に関しては日本以外の国で「認識」が不十分、日本の政府は「認識」は十分にあるが「理解」が不十分、という結論になりました。そして、このような現状の原因については、たとえばスリランカでは数年前まで行われていた内戦、ベトナムでは教育行政における汚職、インドネシアでは行政担当者が変わるたびに教育行政の方針が頻繁に変わる政治文化、といった各国の内部事情が挙げられました。



では、これらの国の政府の「認識」のレベルを深め「理解」のレベルに持っていくためにはどうしたらよいか。当然、内部事情が問題であればそれを解決することを考えねばなりません。ここで「それはユネスコがすべきことか」という疑問が生じました。そして、ユネスコへの提案を考える以上、そういった内部事情にもかかわらず外部から「認識」を

高める策を考えることとしました。ここで着目したのが、ユネスコの GCED に関するフォーラムです。いままで行われていないような、教育行政に関わるすべての国の政府関係者を招くフォーラムを開けば「認識」を高められるのでは、という意見が出ました。そしてそのためには、ユネスコの中でまず早急に GCED について成熟した議論を行い、たたき台としてある程度詳細な草案を作り、そのうえでフォーラムを開くよう提案しようという事になりました。また、どの国においても不十分とされた「人々」の「認識」については、ユネスコが何かをするというより、まず「政府」が少なくとも「認識」のレベルに至り、学校で明確にこれを意識した教育や広報を行ったりしていくのが良い、という結論となりました。

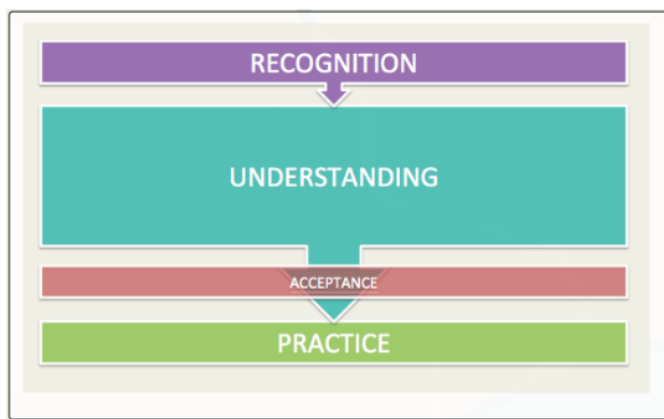
次に日本における、政府が GCED を「認識」してはいるものの（たとえば、文科省の HP には GCED について言及があります）、「理解」しているとはいえない、という状況について、その原因を考えたところ、やはりユネスコが方法論等具体的なアイデアを出せていない

ことが問題だ、という考えに至りました。むろん「理解」に関して日本独自の問題点がないわけではないのですが、最大のものでかつユネスコが解決できそうな問題と言われれば、間違いなくこれだろう、というのが私達は考え、ユネスコへの提案として、方法論等のアイデアを、私達のこれまでの学校内外での経験（どのように地球市民としての意識・スキルを高めてきたか）を踏まえて出していこう、ということを確認し、終わりました。

◆分科会 1 1 【GCED を広めるには（2）～現状分析と具体的解決策②】

いよいよディスカッション最終日。他のテーブルがプレゼン練習に入中、まだまだ議論をし足りないテーブル5のメンバーは、動じることなく議論を進めていきます。

この日はまず、参加者の一部が前日の夜に有志で集まり開いた勉強会において出てきた新しいアイデアや軌道修正案を、テーブルでシェアし吟味することから始めました。主なものとしては、(1)「認識」「理解」「実践」という3レベルに、「受容」というレベルを（「理解」と「実践」の間に）設けるべき、(2)「なぜ2012年からGCEDが本格化したか」を改めて考え、プレゼンの最初に言及すべき、などです。残された時間の長さを考え、吟味の結果重要な論点のみをその日の議論に組み込むこととしました。



さて、議論自体は、政府の「理解」のフェーズでしたが、その前にまず、いわば「その先」のフェーズ、つまり、人々の「理解」、政府・人々の「受容」、政府・人々の「実践」を進めるというフェーズに関し、特に留意すべき点やアイデアについて議論しました。というのも、例として取り上げた4か国が「認識」「理解」レベルにとどまっている状況を踏まえると、これらの国について「認識」や「理解」を高めることについては具

体的に論じうるものの、その先の「受容」や「実践」については具体案を出すには時期尚早であるため、さしあたり抽象的なレベルで軽い検討を加えることにし、先に議論してしまうということになったからです。その中で、例えば政府の「受容」のレベルでは、単にGCEDの趣旨に賛同するだけでなく、「GCEDを実践することに付随する負担、リスク」をも受け入れないと、本当の「受容」とはいえないのではないか、などの様々な意見が出されました。

それぞれの検討が終了した後、ようやく前日の続きとして「方法論等のアイデア」を出すフェーズに入りました。ここで参考にしたのが、本会議前に国内参加者から集めたアンケート結果です。国内参加者に「いつ、なぜ国際交流・国際問題に興味を持ち始めましたか」と問いかけ、20人から回答を得ました。その結果をテーブルでシェアし、まず気づいた点を述べてもらいました。そのうえで、まずそれらを「学校に関係するきっかけ（英語の学習に関連して興味を持った、学校で外国人の友達と接して興味を持った等）」と「学校外におけるきっかけ（個人的なホームステイ、大学のサークル、洋画など）」に分類するのが有用だということになりそれを行い、それを参考にしつつ、方法論に関しどのような具体的なアイ

デアを出せるかを各自考え、その後シェアしました。多くのアイデアが出ましたが、特に「交換留学プログラムを増やす」「多国籍のクラスを作る」など、海外と生徒たちの接点を増やすためのアイデアが目立ちました。

◆分科会 1 2 【GCED はなぜ必要なのか・プレゼンテーション作成】

ディスカッション最後のフェーズとして、それまで様々な角度から GCED について検討を加えてきたことを踏まえつつ、「なぜ GCED を広める必要があるのか」を議論しました。ユネスコは、GCED を広めればそのゴール(a just, peaceful, tolerant, inclusive, secure and sustainable world) を実現できると声高らかに宣伝していますか、なぜそう言えるのか、実は明確に述べていません。そこを私たちにりに考えない限り、GCED について議論したことにはならないということで、締めくくりとしてこれを持ってきました。

まず、GCED によって作られる「地球市民」がどういうものなのかを確認しました。それは、冒頭で述べたような「態度」「知識」「認知的スキル」「非認知的スキル」そして「行動力」を持った人材です。ではなぜこうした人が増えると理想の世界が実現できるのか。特に疑問だったのが、peace です。仮にこうした人が増えたとしても、各人の価値観や利害が異なる以上 conflict が全くなくなるということはありません。それで本当に peaceful といえるのか。しかし私達は、議論の最初の方で定めた a peaceful world の定義を踏まえつつ、人々がこうした資質を備えることで、仮に conflict が生じたとしても、力によらない平和的解決を志向するようになり、それが peaceful といえるのだ、という考えでまとまりました。

以上を踏まえたうえで、プレゼンの作成に移りました。全員が約 1 分ずつ発表する形式をとり、まず発表の分担を決めたのち、スライド(prezi)を作るグループと原稿を作るグループに分かれ作業しました。成果発表会前日の 17:00 までみっちり議論をしその後プレゼン作成に移るとい形となり、短い時間で、広く深い議論を 12 分に凝縮するという難題に直面しましたが、各自が自らの役割を明確に認識し協力して効率よく作業を行うことができ、その日のうちに質の高いプレゼンを準備することに成功しました。

⑤個人所感

今回のテーブル 5 のディスカッションには、ある一つの結論があるわけではありません。GCED をめぐる様々な問題を時間の許す限り皆で一つ一つ検討し、それぞれの問題についてテーブル 5 としての一応の答えを示したにすぎず、たとえば「GCED は良い/悪い」というような明確な結論を導いたわけではありません。成果を強いてまとめるならば、「メンバー各自が GCED について理解し、その可能性と限界とを認識したうえで、各々の考えを持つことができたこと」、となるでしょうか。ただその中で私達は、バックグラウンドも価値観も違う各国の人と議論し一定の結論を出すことの難しさを実感しました。これがまさしく、ユネスコがいま直面している困難そのものなのだと私は思います。それを実感できたこと、そしてその議論は同時にやりがいのあるものであるということに気付けたことは、今後メンバーが GCED について考えるとき、そして地球市民として世界のあらゆる難問に立ち向かうときに、必ず生きてくるものだと確信しています。

テーブル5のメンバーは皆、それぞれ自分の考えをしっかりと持ち、かつそれを他者に論理的に伝え、他者の意見を的確に批判し、他者からの批判を冷静に受け入れ、自分の考えを見つめなおすことに本当に長けていました。そして、分科会で激論を交わした相手とも、ご飯の時間には普段通り笑い合うことのできる彼ら・彼女らの人間的な素晴らしさには、感動すら覚えました。

テーブル5の特徴を一つ記すならば、上には記していませんでしたが、GCEDのディスカッション以外に様々な「エンターテインメント」を時間の許す限り取り入れたことです。これは、自分たちが一週間通して難しい議論に倦むことなく取り組めるように、という私なりの工夫でした。毎朝ラジオ体操をしたり、代々木公園で自然と触れ合ったり、日本文化を紹介する動画を見たり、各国の言葉を互いに教え合う時間を設けたり……。その他、食事や企画、研修旅行も含め、メンバーたちはISCでしかできない経験を存分に楽しみ、多くのことを学びました。その中でメンバーの結束が強まり、互いに何でも言える雰囲気醸成され、結果的にディスカッションに好影響を与えたと私は確信しています。

最後に、私個人として学んだことを一つ記して終わりたいと思います。例年多くのテーブルチーフが「英語を用いた議論の難しさを感じた」と書くのですが、むしろ私が強く感じたのは、「一番大事なのは、英語ではない」ということです。もちろん、本会議中、自らの英語力不足を痛感しもどかしく思うこともありました。しかしそれでもなんとかまとめていたのは、大学での勉学を通して鍛えた論理的・批判的思考という「核」があったからだといま思います。メンバーの中でも、英語力自体に差が無かったわけではないものの、全員が論理的・批判的な思考力、教養・知識の深さ、そして価値観の違う者を受け入れ敬意を持てる人間的素養を持っていたからこそ、難しい議論を乗り越えることができたのだと考えています。どんなに時間がかかっても、簡単な言葉しか使えなくても、相手を理解しつつ深みのある論理的な意見を表明できる方が、議論に遥かに貢献できるということは疑いありません。



私自身としては今後、まだまだ英語のスキルを伸ばしていかなければならないと感じると同時に、本当に大事な「頭」と「心」をより一層涵養していきたいと強く思いました。ISCに関わってくださったすべての方々、どんなときも支えてくれたISC61のすべての実行委員・参加者、そして特にテーブル5の尊敬すべき仲間たちに、心から感謝申し上げます。

*プレゼンテーション資料 <https://prezi.com/uhcqcpljbbz4/global-citizenship-education/>

分科会総括

テーブルチーフ長 石井 智士

今年度の会議では5つのディスカッションテーマがあり、成果発表会に向けて様々な準備を経て、先日無事終えることができました。参加者の皆様および本会議の準備にご協力いただいた方々に感謝の言葉を申し上げます。

第61回国際学生会議では、実行委員長の山永航太が掲げた「異文化理解による平和への貢献を」という総合テーマのもと、「ナショナルアイデンティティ」、「食の安全」、「LGBT」、「越境する市民間関係」、「グローバルシティズンシップ教育」といった5つのテーマに分かれて、各参加者が1つのテーマに所属し、ディスカッションが行われました。各テーブルチーフが掲げたテーマに対し、参加者は自分たちが目指すべきところは何か、なぜこのような議論が求められているのかといった単純な疑問を繰り返すことで、私たちが直面している問題を再認識しました。次の問題解決に向けての議論においては、参加者自身が持つ意見が重宝されました。11か国から集まった背景の異なる学生だからこそ提案できるものもあり、彼らのシナジー効果が大いに発揮された場面だと実感しています。その結果、成果発表のときに部屋が埋まるほどの来場者がいるにも関わらず参加者は自信を持って発表ができたかと確信しています。

本会議を終えて、参加者および実行委員は会場をあとにしました。私たち一人ひとりがディスカッションを通して得てきたものは、これから先の社会で必要になることです。成果発表会を終えて、参加者から達成感や後悔といった様々な気持ちが感じられましたが、この経験を活かして将来、私たちが本当に直面する可能性のある問題に対して取り組み続ければ、世の中は変化していくと私は信じています。参加者および実行委員には、世の中を変化させる力が十分にあると確信しています。

今回、テーブルチーフ5人がテーマ選定から参加者選考、本会議まで動いていきましたが、各テーブルチーフが求めるディスカッション像に持っていき、成果発表に至るまでの過程には、参加者がテーマに対して真摯に向き合い、実行委員全員のサポートがあり、各テーブルチーフが協力してきたからこそできたものだと確信しています。昨年11月から動き出し、約10か月もの間、第61回国際学生会議を成功させるためにメンバーの一人となり尽力できたことを大変誇りに思います。

テーブルチーフ一同、ご協力してくださった皆様にこの場をお借りして、改めて感謝の意をお伝えいたします。

各プログラム報告

開会式

本会議最初のプログラムである開会式は、参加者全員が初めて顔を合わせる場となりました。2名の国内参加者が司会を務め、実行委員長による本会議開会挨拶、国内・国外参加者の代表各1名による参加者代表挨拶が行われました。各々の本会議に向けた心境、意気込みに聴衆は耳を傾け、気が引き締まる思いで第61回国際学生会議は始まりました。



基調講演

第61回国際学生会議の開会式では、後援をいただいた経済人コー円卓会議日本委員会の事務局長である石田寛様に基調講演をお願いいたしました。ご講演は、「Need」「Value」「Interest」の3つを重要度の高い順にランク付けを行い、それを周りの数名と見せ合い、簡単な議論を行うという、ワークショップ形式で進みました。単純な問いかけに対しても、参加者それぞれの個性が表れ、多様性の幅を実感することができました。(写真:経済人コー円卓会議日本委員会の石田様のご講演の様子)



ビンゴ&手紙～5年後の私へ～

前半はビンゴ大会、後半は未来への自分の手紙を書きました。各々の参加者が持ち寄った各国の名産品をテーブルに置き、ビンゴ大会を行いました。普段は分科会のグループと行動する機会が多いですが、他の参加者と友達になる良い機会となりました。

5年後、東京オリンピックが開催されます。このプログラムのメインテーマである平和への思いを馳せながら、5年後の自分に思いを馳せました。この手紙は5年後、電子メールを通じて、参加者の手元に届きます。



日本文化体験

NPO日本文化体験交流塾様にご指導いただき、日本文化を代表する風呂敷、折り紙、茶道体験を行いました。風呂敷体験では現代風にアレンジした利用方法を教えていただき、茶道体験では風情ある和室で和菓子、お抹茶をいただきました。普段触れることのできない日本文化に触れることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。



フィールドワーク

東京駅KITTE館内に併設してあるインターメディアテクを訪問しました。KITTE一階では相撲イベントを行っており、日本の国技である土俵の再現、力士の回し等、日本文化に触れあうことができました。また、インターメディアテクでは骨格標本や博物標本を見学しました。白熱している分科会とは対照的にフィールドワークでは外の空気を吸って良い気分転換となりました。



本会議研修旅行

本会議5日目の8月28日に本会議研修旅行を行いました。5コースに分かれ、浜離宮、上野動物園、池袋、原宿・渋谷、浅草をメインに観光をしました。東京の名所を巡り日本の由緒ある観光地から現代の日本の文化まで肌で感じることができました。また、イベントの一つに抽選であてた相手へお土産を買うイベントも組み込まれており、それぞれがシークレットフレンドへ思いをはせながらお土産選びをする一面もありました。



成果発表会

国際学生会議では分科会で話し合った成果を一般に発信する場として成果発表会を行います。4つのテーブルが1週間の集大成をプレゼンテーションに込めました。聴衆との質疑応答も活発に行われ、第60回国際学生会議で最も重きを置いていた「戦後70年の節目に、世界中の学生が平和を模索する場をつくり、彼らが協議した成果を発信し、社会の改善に貢献する。」という目標を達成することができました。



基調講演

第61回国際学生会議開会式の基調講演は、国際教育振興会賛助会会長の南原晃様にお願いしました。ここ数十年間の世界の経済状況を踏まえ、どのように世界が変化しているのかというお話に加え、更なるグローバル化に向けてこのような会議に参加する素晴らしさもお話してくださいました。

ウェルカム・フェアエルパーティー

ウェルカムパーティーでは、これから9日間をともにする仲間との初めての顔合わせを行いました。緊張している参加者、故郷の歌を披露してくれる参加者など様子が見受けられましたが、パーティーが終わるころにはすでにみんな打ち解けていました。一生の友となるであろう仲間と、思い出の1ページ目をそれぞれの胸に刻みました。

フェアエルパーティーでは、本会議の思い出を話しながらお互いの苦労をねぎらいました。また、本会議研修旅行で購入してきたシークレットフレンドへのプレゼントを交換も行いました。9日間過ごした仲間との別れを惜しみ、涙あり、笑いありの素敵な時間を過ごすことができました。

閉会式

閉会式も開会式同様、国内参加者2名が司会を務めました。実行委員長による閉会挨拶の後、国内・国外参加者の代表各1名による参加者代表挨拶が行われ、1週間の思いが溢れる参加者の挨拶に会場の雰囲気是和みました。国も言語も文化も思想も違う学生同士がお互いを理解し、心を一つにできたと感じられた瞬間でした。最後は全員で集合写真を撮影し、第61回国際学生会議は幕を閉じました。



第 5 章 感想

ISC61 の感想

ディスカッションに対するフィードバック

ISC61 の感想

金沢大学 斎藤真友

第 61 回国際学生会議(ISC61)を終えた今、私が率直に感じることは、この事業に参加することができて本当によかったということです。ISC61 は、私にとって、新たな自分に気づかせてくれ、かつ大事な仲間を作ることができた場所となりました。

私が ISC61 に応募を決めた理由は、ISC61 直前までの語学留学を終えた後に、自分が留学を通じて成長できたかどうかを試すためでした。それまでの私は、自分の英語力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション力など、すべてにおいて自信がなく、ISC61 のような事業への応募も踏みとどまるような状態でした。そんな自分を少しでも変えるため、語学留学を経て ISC61 のような事業に参加することを、私の過去約一年間の目標として掲げていました。幸運にも私は選考を通過させていただき、本事業に参加できることになりました。

本会議一日目、初めて海外参加者と顔を合わせ、少し緊張しながらも会議は始まり、九日間はあっという間に過ぎ去りました。私自身が掲げていた目標は、当初考えていたよりもすぐに達成を実感することができました。ディスカッションについていくことに必死になるというよりも、それ自体を非常に楽しんでいました。それと同時に、次はテーブルのメンバー全員が、きちんとディスカッションに入っていくことができているかどうかに注意を払うことが必要だと感じました。自分中心だったこれまでとは打って変わって、テーブル全体のまとまりを意識することは、容易ではありませんでした。振り返ると、これまでの私は、自己成長にとらわれるあまり、全体を意識して行動する経験が少なかったように思います。そのような点では、ISC61 での 9 日間は、チームの力を最大限に発揮するために自分がどのような役割を担えるか、ということについて考え、行動するきっかけとなりました。

また、本会議の合間に、私はインドネシアとフィリピンからの参加者二人に、日本に対する率直なイメージを聞きました。それは、学校で戦時中の日本についてどのように学んだかということ、今の人々の日本に対する印象はどのようなものか、などについてです。出会ったたった数日間という間柄でしたが、このような真剣な話もできると思い、私は二人に質問をしました。思ったとおり、二人とも真剣に答えてくれ、私たちはお互いの国について深く考える時間をもつことができたと思います。

私は、たった九日間の事業で、こんなに心を通わせることができる仲間ができるとは思っていませんでした。つらい経験を共にする友人は一生の仲間になると聞きますが、これほどまでに、時間は関係ない、と思うほどの短期間で信頼できる仲間を作ることができた喜びと驚きでいっぱいです。

ISC 61に参加したことで私の今年の夏は大変収穫の多いものとなった。まず、参加しようと思った動機ですが、昨年マレーシアで1年間語学留学をした私は、帰国後大学に復学したものの、毎日の生活に物足りなさを感じていました。そこで偶然 ISC のポスターを構内で見つけ、世界中から集まった同世代の仲間と現代の世界が抱える問題について話し合えるという、私にとっては非常にチャレンジングな内容に魅力を感じました。また、北海道という遠方にいながらも交通費の補助が出るということを知り応募を決めました。

私の参加したテーブル5のテーマは GCED Global Citizenship Education の可能性と限界についてでした。以前から貧困問題をはじめとして世界のあらゆる問題を解決する強力な手段となりうる教育に興味のあった私は、この国連やユネスコが推し進めようとしている教育プログラムの内容だけでなく、GCED はこれからの教育としてベストなものなのか、正しいものだとしたら実際如何にして各国に浸透させていくべきなのかということを考え、このテーマに関心を持ちました。7月の全体召集会では、歴史と伝統ある学生会議の一員に選ばれたということに身が引き締まるとともに、全国各地から集まった同世代の学生と触れ合うことで、この会議が自分の期待以上のものになるだろうという喜びを感じました。8月のテーブル事前勉強会では議論の進め方や、GCED についての議論を進めていくなかで問題となりうる点などを整理したものの、自分たちの議論がかなり困難なものになりうるであろうという覚悟を再確認することとなりました。

本会議では、自分なりに資料を読み込み議論しうる程度の知識を持って臨んだものの、自分の力不足を痛感することとなりました。特に海外参加者の英語力、思考力、創造力、対話力は驚くべきものであり、彼ら彼女のような同世代がいることに多大な刺激を受け、ました。ディスカッションではメンバー一人一人が自分たちなりの結論に向かって最大限貢献しようという意識を持っていました。「peace な世界とは何か」などかなり抽象的な概念について多く話し合われたにもかかわらず、最終的にテーブル5として GCED についての考えをまとめられたことは大きな喜びであり、達成感のあるものでした。

ISC 61 で得られたものはディスカッションによるものだけではありませんでした。議論がうまくいかないときでも、テーブルメンバーとは常に笑いあい、ルームメイトとはその日あった議論について考えを交換し合ったり、お互いくだらない話で笑い転げたりと、仲間と交流できたこの思い出、そして人のつながりは ISC に参加しなければ絶対に得られなかったものでした。今年の夏が自分にとって収穫の多い、最高の夏になったことは間違いありません。そしてこの最高の夏を与えてくれた、committee メンバーの方々、国内・海外参加者、そして個性豊かなテーブル5を引っ張ってくれたテーブルチーフをはじめとするテーブルメンバーに大変感謝しています。

Was it worth my time and energy to come all the way from Morocco to Japan, just for this thing called ISC61 ?

I can only think of one answer : HELL YES. Now, let me tell you why.

It all began when I came across a random ad on Facebook. One click was all it took for me to be where I am now. Choosing a discussion table, completing the application form, doing the interviews, researching and preparing for my visa went very fast. 5 months felt like 5 days and I was already waiting for my flight to Kansai Airport. My first week, or 4 days to be exact, was intense. I had the chance to live with an amazing host family, sleep on tatami, eat homemade Japanese dishes, watch TV until very late at night, visit castles, gardens and museums, wear Yukata, go on a cruise and take lots and lots of pictures. And not a single time did I felt alone or estranged. I was always surrounded and taken good care of. By the end of the day, I would end up with hundreds of pictures, new vocabulary, extra-information about Japan and the world, 2 or 3 new friends, swollen feet and a full stomach. But most importantly, a very very happy heart. Naturally, it was emotionally hard for me (okay, yes, I cried a little bit... I mean a little bit too much..) to leave all of that and head off to Tokyo.

Being the last group to arrive, we had to rush and get ourselves ready for ISC61's opening ceremony. The speeches, as I see it, got directly to the point of why we were all gathering at this place and that made me eager to start the discussions. As time passed, I got closer to my table members and realised how lucky I was. We shared a lot for "strangers" who just met one week earlier : Thoughts, laughter, smiles, worries, rice bawls, public baths, tears, excitement, ideas, Wi-Fi spots, Monster drinks, short nights, green salad, fish and toilet breaks. Not to mention the atmosphere in which we worked, all thanks to our table chief. She'd give us the outline of what we have to focus on and then we'd discuss and think freely with no limitation, making the conversations appealing to new and deep ideas.

ISC61 was far beyond my expectation. The lessons I learned about myself and the others and the friendships I made are for me the greatest treasures of all. Nowhere else will you be able to compile this much information, thoughts and emotion in such a short time.

In my 21 years of life, there was nothing as enriching and fulfilling as this journey was. And for that, I am forever grateful to Baasa, Pon, Kanako, Marina, Kyoko and all of the committee members and participants.

Thanks to you, I can proudly say to the world : My summer was better than yours !

It may be only less than two weeks, but I believe the memories of this conference will lay down in my mind forever. How can I say about this conference? This is too far beyond my personal expectation. I am running out of words to attribute International Student Conference 61st in Japan this summer. If they invent upper degree terms of “amazing”, “stunning” and “exciting”, I will undoubtedly use that ones. Well, people can say I am exaggerating too much, but that is the cliché of personal feeling issue : it is always hard to depict it in words.

I can say this conference started since months before it actually began in August 24th 2015. I am surprised and touched by committees determination and professionalism since I got my interview, preparation, and pre-departure. They showed eagerness to do their best to the participants. In my personal experience, even the committee needed to sent the documents twice to Indonesia, because I terribly made a mistake. I was also very hard to reach in online during preparation and pre-departure since I got network access issue in my hometown, and I know, that honestly would make anyone annoyed as that was very urgent period. However, the committee did not express any single dissapointment, even the committee still sent couples of warm and smiling messages. I am very touched and enchanted till now. It was not only in that time, when the conference itself began, the committees still display the same attitude. The discussion went very tense, full of debate, but the table chief managed to keep the friendly and constructive atmosphere. The table members came from diverse background, it was very difficut to converge into one thought and solution. Culture and language, especially accent, differences also added some obstacles at the very first time. But, it gave me lessons to be learnt, so that I understood deliberate dialogue and good attitude were able to fuze the barriers. I went to several interesting places, such as Roponggi, Tokyo Tower, and Meiji Shrine, in the midst of conference. It was well-planned to make the conference not become that boring. The places I visited were also impressive, in the dusk we had a japanese dinner, they really made a pleasing trip plan. During my stay, the committee served the participants pretty well. At least, they greeted and smiled everytime. A very friendly gesture. They

gave us exciting side programs as well, like japanese cultural experience, bingo games, letter for 2020 and museum visit.

At the end of the day, ISC61 has developed me one step ahead. It was my first international event in college life. It gave tons of lessons to many aspects of my life. It improved me personally in the way I treated different people. I can respect and appreciate diversity more than before. I can express my thoughts better to the diverse audience. I sharpen my confidence to be a global citizen, an international student. Substantially, the conference was full of surprise, a lot of ideas were coming to the stage. Those might not answer all of the questions and, moreover, some of them left questions. Yet, those blow new hopes and inspire new ideas. Those proves that student from all over the world still care and be sensitive to the global issues and, one day, when they will be tomorrow leaders, they will keep those in mind, and thus, they can deal with global solution, as global citizen. Therefore, they can create peace in the future, for a better world we live in. Last but not least, I want to give my highest gratitude and credit to the committees of ISC61 for their hard work, determination, and love. Also, my deepest thank should be delivered to all participants for the new friendships we tie up and all parties who support ISC61. All of us have contributed to the world, and I hope we continue this contribution to our daily life. To end this passage, I want to quote my favourite lyrics to express my memories in this event, *"We keep this love in a photograph, we made these memories for ourselves, where our eyes are never closing, hearts are never broken. And time's forever frozen still"*. And yes, because this experience will lay down and be frozen inside my deepest heart, forever...

2015 年 8 月 31 日

ディスカッションに対するフィードバック

経済人コー円卓会議日本委員会 専務理事兼事務局長
九州大学経済学府 客員教授
石田 寛

不透明で、不確実な時代の中で、資本主義の立ち位置や存在感がこれほどまで形骸化していくことに、私はとても危機感を持っています。資本主義が生み出した『負の遺産（格差社会）』をどのように解決に導く事ができるのかどうか、この地球中に生きている人類一人ひとりが力を合わせて、真剣に考え、実行していかななくてはならない喫緊課題です。

こうした状況において、この国際学生会議では、自主的に同じ志を持つ人々が日本だけではなく、世界 10 カ国から総勢 42 名が集いました。そしてこの会議では、『異文化理解による平和への貢献を』を総合テーマに、以下の 5 つのテーブル（「ナショナルアイデンティティ」、「食の流通における安全と差別」、「LGBT フレンドリーな社会に向けて」、「越境する市民間関係」、「教育とグローバリゼーション」）で熱い議論を交わしていたことについて共感すると共に、いくつかコメントをさせていただきます。

私は、山永実行委員長が冒頭挨拶に“Peace”と“Communication”を常に念頭に掲げながら、参加者全員がお互いを尊重し合う姿勢を確かめ合うことの大切さを強調していたことは、とても印象的でした。そして、彼の挨拶を聞きながら、実行委員全員がこの国際会議を成功させる強い信念やコミットメントを感じたと同時に、参加者全員で一致団結して、社会的課題の解決に向けて真剣に取り組もうとする姿勢が顕著に芽生えたと強く感じました。

- ・ テーブル 1：ナショナルアイデンティティ
～国際社会における形成、揺らぎ、維持～

このテーブルでは、問題提起をしっかりと仲間で議論した結果、その課題解決に向けた取り組みとして、「Adaption（受容する）」、「Sense（見極めるセンス）」、「Curiosity（本質への追求心）」の 3 つに絞り、今後これらをより多くの人々に共感してもらえるように働きかけていくことが大切だと結論を導くことができたことは、とても素晴らしいと思いました。

物事の本質を見極める「心の目」を養うためには、一人ひとりが客観性を保持し、普遍的に真理を追究することを心がけていくことが肝要ではないでしょうか？そのためには、「自分を知り、他者を知り、世界を知ること。そして世界から自分の立ち位置を見極めること」だと思います。そして、最後に「Conflict Management」をしていくために一番大切なことは、何か想定外のことが起き、社会にストレスが生じた際には、その問題を“形成”した原因を追求することです。それと同時に、自分の心が“揺らぎ”始めたら、不安（Fear）に陥らないためにも、平常心を保つために「ぶれない軸」を持ち続けることが自らの心を安定に“維持”するための秘訣だと思います。

- ・ テーブル2：食の流通における安全と差別

このテーブルでは、「安全基準の違いによる流通の障壁」を題材にして、3つの解決策（「安全基準の差を縮める」、「組織による監視」、「人々への認知」）を打ち出したことは、物事の本質を適確に捉えていると思いました。その中でも、特に私が最も強い関心を持ったのは、「安全基準の差を縮める」と「組織による監査」の解決策の中で、グローバルで掲げている厳しい基準とローカルで対応している独自の基準に差があることで、安全性や公平性からの観点で「項目数」に着眼点を当てて、問題を指摘したことです。

この課題は、今世界中で活発な議論が展開しています。一番の問題は、消費者視点である安全基準に焦点を当てて過ぎてしまい、膨大な「項目数」が増大し、生産者や流通業者の負担増となり、コスト増大につながり、結局消費者がその負担を喰べられます。格差社会においては、コスト高で食べたいけど買えない人々が増えてしまい、アクセサビリティの観点からも問題が指摘されています。この課題の本質は、性善説か性悪説で対応策を講じることができるのか、そのスタンスで物事の捉え方が大きく変わってきます。今後のトレンドとしては、グローバル基準だけではなく、ローカル基準をきちんと尊重した形での対応する方向で動き出しています。つまり、“Think Global, Act Local”とか、造語として“グローカル”という言葉も使われ始めています。

- ・ テーブル3：LGBTフレンドリーな社会に向けて

～今私たちにできる取り組みとは～

この課題は、多くの企業がどのように対応すべき様々な検討を進めています。このテーブルでは、“セクシャルマイノリティ（性的少数者）”の一環として、特にLGBTの問題を取り上げていました。そして、この問題を引き起こす原因については、まだLGBTに関して、市民社会に正しい形でコミュニケーションが伝えられていないために偏見적인見方が根強く、認知されていないことを指摘していました。今後LGBTの方々と市民社会が差別なく、共存して生きていけるために、教育コンテンツを充実させて、理解してもらえるように働きかけていくことの大切（LGBT Friendly Society）を構築していくことの必要性を唱えていたことは共感できました。

また、今後市民社会がセクシャルマイノリティを受け入れていくための一手段として、常時ネガティブな側面だけを議論していくのではなく、ポジティブな側面も議論していくことが重要ではないでしょうか？例えば、彼らの強みや特徴を活かした形で、それが社会的課題の解決に役立つことができれば、市民社会もこれまで違った態度をとり、より“Friendly”な形で、社会に受け入れてもらえるようになると思います。

- ・ テーブル4：越境する市民間関係

グローバリゼーションがますます加速する中で、我々の日々の生活環境はどのような変化を喰われ、時には脅威に感じるかもしれません。このテーブルでは、この課題を真っ正面から捉えて議論したところ、ネガティブな結果についてその原因、解決策を摸索することが大切だと結論付け、4つのテーマに絞り込んでディスカッションしながら深堀したことは評価します（①歪な労働環境問題の解決、②開発支援での不公平の解消、③腐敗防止に向けた教育システムの拡充、④文化交流を促進し、お互いの学ぶ場の提供）。

私は、あえて逆説に考えてみても面白い内容だと思いました。それは、このグローバリゼーションを“ストップ（止め）”させることで、コンフリクトを起こさせないことができるかどうかです。つまり、お互いに知らなくて良いことまでオープンに情報が共有化できてしまうため、今自分が住んでいる生活環境に不満や不公平を抱き、問題が勃発しているケースも多々あるように思えます。この課題を克服させていくためには、高度なテクニックになりますが、“Restorative Justice”という手法を用いて、当事者同士でダイアログを繰り返しながら、次世代の人々ためにどのように改善し、どんな価値を見出していくべきか修復しながら進めていくアプローチ方法（お互いに学びの場を提供します：“Mutural Learning Process”）も一案として挙げられます。

- ・ テーブル5：教育とグローバリゼーション

～global citizenship education の可能性と限界～

このテーブルでは、教育とグローバリゼーションを題材にした時に、UNESCO の「Global Citizenship Education：GCED」を取り上げ、この教育プログラムが各地域に広げられるためにどうすべきか様々な切り口で話し合われたことは面白い着眼点だと思いました。

教育は、一人ひとりに「希望」を与えるきっかけにもなります。それは、識字率を上げていくことで読み書きができるようになり、相手とのコミュニケーションを円滑に進められ、そして自分の考えを伝えることで共感が持てたり、持てなかったりすることで様々な知識を共有することができます。

ただ、各地域における宗教観や価値観を尊重した形で、どこまでこのGCEDを導入していくべきかもう少し検討する余地はあるかもしれません。このGCEDを導入する国や政府にとっては、内政干渉と捉えられては困ります。おそらく普遍的なレベルで捉えようとして“just peace, tolerant, inclusive, secure, sustainable world”といった共通理解できる部分において社会的課題を解決に見出すための大切さ学ぶと同時に、各アイデンティティをしっかりと尊重することも重要だと認識させていくことは不可欠ではないでしょうか？

各テーブルの成果発表をお聞きして、多様な価値観の中で多面的に議論し、各テーブルチーフが四苦八苦しながらきちんと纏めたことに敬意を評します。皆さまがこの限られた時間内で議論を纏めてきた苦労は、決してお金を払っても買えるものではないですし、これからの人生においても、大変貴重な体験をされたと確信しています。

最後に、私は常日頃から以下のことを念頭に置きながら、行動していますので、ぜひ皆様と共有させてください。

- ・ 自分を知り、他者を知り、そして世界を知ることができるか？
- ・ 指示待ち型人間から脱却し、提案指図型人間へ脱皮できるか？
- ・ 自由自在に発想を変えて、多面的な切り口で物事の本質を見抜けるか？
- ・ ぶれない判断軸を持ちながら、決断できるか？
- ・ 自らが課題の抽出、何をすべきか理解し、行動・実践できるか？
- ・ 自分自身で自らのあるべき姿を磨き上げていくことが出来るのか？
- ・ 世界観の中で、自らの立ち位置を把握しているか？
- ・ 多様な価値観の中で、持論形成ができるか？

そして自らの信念は、“自らを正し、誰が正しいではなく、何が正しいか”です。

これからも皆さまお一人ひとりが平和な社会秩序が構築していくことの重要性を念頭におきながら、自らの道を切り開いていくパイオニア精神を持ち続けていくことを祈念しております。

また、どこかで皆さまと再会できることを楽しみにしています！

以上

第 61 回国際学生会議 事業報告書

発行責任者：山永 航太

編集責任者：長岡 れいな

発行：日本国際学生協会 第 61 回国際学生会議実行委員会

〒662-0891 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155

関西学院大学文化総部 I. S. A.

